

平成 23 年度 認知症介護研究・研修東京センター研究事業

「認知症高齢者への環境支援指針(PEAP 日本版)」
を取り入れた認知症フロアの居場所づくりと
利用者の変化に関する研究

報告書

社会福祉法人 浴風会

南陽園

平成 24 年 3 月

目次

I	目的と取り組みの背景	1
I-1	目的	
I-2	取り組みの経緯／研究倫理	
II	環境づくりの手法	
II-1	6ステップ	3
II-2	「認知症高齢者への環境支援のための指針（PEAP 日本版）」とは	4
III	実施	
III-1	取り組みの流れ	6
III-2	6ステップの取り組み	7
IV	利用者行動調査	30
V	職員意識調査	
V-1	キャプションカードの分析／キャプションカードに見る職員の視点の変化	36
V-2	職員の環境づくりへの参加に関する意識調査	40
V-3	多面的施設環境評価尺度による職員の環境への満足度調査	43
VI	考察	50
VII	課題	51
	講評－南陽園における環境づくりの成功のポイント	53

「認知症高齢者への環境支援指針（PEAP 日本版）」を取り入れた
認知症フロアの居場所づくりと利用者の変化に関する研究

研究代表 宮川 永美子

研究委員 涌井 雅也

若林 光世

土井 香介

合谷 孝文

研究協力 南陽園 5階フロア 全スタッフ

研究アドバイザー 児玉桂子

(認知症介護研究・研修東京センター副センター長)

I 目的と取り組みの背景

I-1 目的

ご利用者の暮らしを基本に考えた環境づくりに取り組むには、認知症高齢者ができるだけ自立を維持し、その人らしく暮らせる環境や、それを支えるケアについての共通の視点を持つ必要がある。そこで私たちは認知症フロアの環境づくりに「PEAP」を取り入れ、現存の環境の見直しを行い、ご利用者の居場所づくりを行うことで得られるご利用者の行動や周辺症状の変化、およびそれに伴う職員の意識変化に関する調査を実施した。

I-2 取り組みの経緯

近年、認知症高齢者にとってさまざまな意味での環境が重要であることは、多くの研究者や専門家が指摘している。我々の施設（特別養護老人ホーム南陽園 5階・認知症フロア）では、昨年（H22 年度）個別ケアの充実に向けた取り組みを行うため、リビングにキッチンを設置した。また、38 名のご利用者のグループの再編成を行い、ご利用者個々の状態に沿った支援とグループごとのリビングでご利用者が有する能力を最大限に活用できるように配慮した環境づくりに取り組み、一定の成果が認められた。

しかし、従来型施設であるが故の「無駄に広いだけの空間」は改善されておらず、ご利用者にとって満足のいく環境には程遠いのが現状であった。

「もっとご利用者に満足してもらえる環境を作ることは出来ないのか」と職員で意見交換をしていくうちに「認知症高齢者への環境支援のための指針（PEAP 日本版）」にたどり着いた。

「PEAP」は施設に入所している認知症高齢者に対して、広い意味での環境支援を行うための指針である。

その指針は大きく 8 つの次元により構成されており、8 つの次元は認知症高齢者への環境支援の柱（目標）となる項目である。それぞれの次元の下には環境支援のポイントとなる中項目、さらに支援の具体例が記された小項目によって構成されており、小項目は中項目を、中項目は次元（目標）を、それぞれ達成させるための手段や考え方になっている。また、「PEAP」の導入を決定づけたのは「1 から 8 のどの次元から取り組んでも構わない。全ての次元に取り組めなくても構わない。施設の課題や環境に応じて、取り組みやすい次元からはじめて良い。」との記述があり、形式に縛られることなく実施出来ることが可能であったためである。

幸いにも当法人内の認知症介護研究・研修東京センターに「PEAP 日本版」の開発者である児玉桂子氏が副センター長に就任され、我々の施設環境づくりのアドバイザーとして意見を頂けることとなった。

こうして、本格的に「PEAP」を使用した施設環境づくりに取り組んでいくこととなった。

研究倫理

今回の研究にあたり施設長の承諾を得た後に、行動調査を実施する6名のご利用者のご家族には各々に環境づくりへの取り組みを説明し同意を得て調査をおこなった。

また、その他ご利用者ご家族にも家族会を通じて環境づくりへの取り組みを説明した。

利用者行動調査に関しては、ご利用者の行動制限などを強いることはなく、ご利用者が過ごされている空間と滞在時間、発言や認知症による周辺症状の有無等の記録だけに留めご利用者に負担がかからないように配慮した。

データに関しては個人が特定されないようイニシャルで示し、施設内の鍵のかかる保管庫に保管した。

II 環境づくりの手法

II-1 「施設環境づくり支援プログラム」(6ステップ)

認知症の人は環境から大きな影響を受けている。「施設環境づくり支援プログラム」は認知症の人に相応しい暮らしとケアの提供を目指して、まず目に見える物理的環境を変えることにより、ケアや運営へと波及させていくように開発されたプログラムである。6つのステップで構成され、認知症ケアと環境への気づきを高め、課題や目標を共有しながら、認知症の人に相応しい環境調整に役立つアイデアを実現し、その効果を検証していくプロセスを明らかにしている。(表1)

表1 6ステップ「施設環境プログラム」

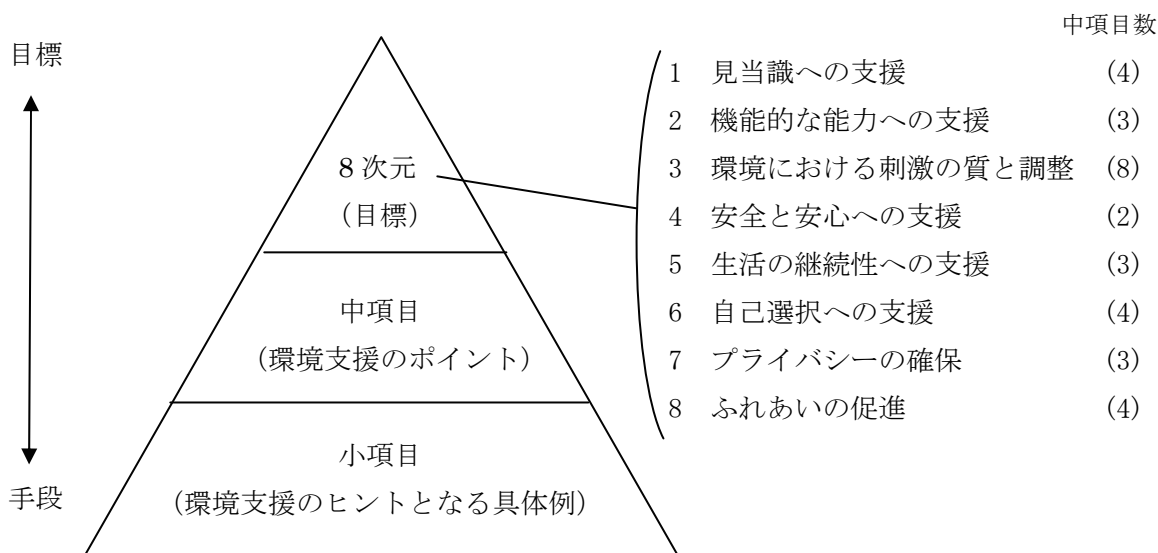
ステップ	作業と様式
ステップ1 「認知症ケアと環境への気づきを高める」	<ul style="list-style-type: none">・ PEAP の視点を学ぶ・ 施設の課題と取り組みたい内容を考える
ステップ2 「施設環境の課題を捉えて目標を定める」	<ul style="list-style-type: none">・ キャプションカードの作成 <p>※キャプションカード</p> <p>現状の環境に対する「気づき」を広く自由な形で集めるために用いる。参加者が施設内で気づいた場面を写真に収め、それに対するコメントを簡潔に記入する。</p> <ul style="list-style-type: none">・ キャプションカードを基に話し合いを行う。キャプションカードを PEAP の次元で整理し、目標を設定する。
ステップ3 「施設環境づくりの計画を立てる」	<ul style="list-style-type: none">・ 実現したい暮らしを生活者の視点で「暮らし方シミュレーションシート」に記入していく。それを実現する為に行うことを「環境づくりアイデアシート」で整理する。
ステップ4 「環境づくりを実施する」	<ul style="list-style-type: none">・ 環境づくりのアイデアを整理して取り組みやすく、効果があるものから実施していく。
ステップ5 「施設環境づくりを暮らしとケアに活かす」	<ul style="list-style-type: none">・ 環境づくりの目的を PEAP の次元で再確認し、新たな環境での暮らしやケアの目標を立てる。・ 新たな環境の活用状況の情報を共有し、利用者の暮らしやケアに活かす。
ステップ6 「環境づくりを振り返る」	<ul style="list-style-type: none">・ 「環境づくり振り返りシート」により環境づくりの取り組みを振り返り、取り組みによる効果や課題の整理を行う。・ 次の環境づくりに繋げる。

Ⅱ－２ 「PEAP（認知症高齢者への環境支援のための指針）」とは

ピープと呼ばれるこの指針は、米国で認知症ケアユニットの評価尺度（PEAP：Professional Environmental Assessment Protocol）として開発され、それを日本の実情に合わせて施設環境づくりの指針として改訂が行われたものである。施設環境づくりプログラム全体を通じて、環境づくりの視点を参加者が共有するために重要な役割を果たしている。

PEAP は施設の物理的環境に重点を置きながら、ケアや施設の運営方針なども含めた多面的視点から、認知症高齢者の暮らしとケアに重要な 8 つの次元と環境づくりのポイントとなる 31 の中項目から構成されている。さらにこの下に、環境づくりのヒントとなる小項目があり、絵画などの小物、家具や福祉機器、住み方の工夫など、現場でも実現可能な項目が沢山含まれ、取り組みやすさが評価されている。

「見当識への支援」「機能的な能力への支援」「環境における刺激の質と調整」「安全と安心への支援」「生活の継続性への支援」「自己選択への支援」「プライバシーの確保」「ふれあいの促進」といった PEAP の 8 次元は、認知症高齢者が出来るだけ自立を維持してその人らしく暮らし、それを支えるケアにとって重要な視点である。流れ作業的な業務から、個々の認知症高齢者の暮らしを大切にしたいケアへと意識改革を行う上でも PEAP は重要なツールとなるものである。（※PEAP にもとづく認知症ケアのための施設環境づくり実践マニュアル）



出典：児玉桂子：PEAPに基づく認知症ケアのための施設環境づくり実践マニュアル、p.13、中央法規、2010

図2 PEAPの次元と項目の構成

次元	次元の概念	中項目
1. 見当識への支援	時間・空間・そこで行われていることなどが、入居者にとり分かりやすくする環境支援	1) 環境における情報の活用 2) 時間・空間の認知に対する支援 3) 空間や居場所のわかりやすさ 4) 視界の確保
2. 機能的な能力への支援	入居者の日常生活動作や日常生活の自立を支え、さらに継続していくための環境支援	1) 入居者のセルフケアの自立能力を高めるための支援 2) 食事が自立できるための支援 3) 調理、洗濯、買い物など活動の支援
3. 環境における刺激の質と調整	入居者の適応や感性に望ましい良質の環境の刺激を提供する。および環境の刺激が混乱やストレスを招かないように調整する	A環境の刺激の質 a-1) 意味のある良質な音の提供 a-2) 視覚的な刺激による環境への適応 a-3) 香りによる感性への働きかけ a-4) 柔らかな素材の提供 B環境の刺激の調整 b-1) 生活の妨げとなるような騒音を調整 b-2) 適切な視覚的の刺激の提供 b-3) 不快な臭いの調整 b-4) 床などの材質の変化による危険への配慮
4. 安全と安心への支援	入居者の安全を脅かすものを最小限に留めるとともに、入居者、スタッフ、家族の安心を最大限に高める環境支援	1) 入居者の見守りやすさ 2) 安全な日常生活の確保
5. 生活の継続性への支援	慣れ親しんだ環境とライフスタイルを継続するために、個人的なものの所有や家庭的な環境づくりの2つの側面から支援する	1) 慣れ親しんだライフスタイルの継続への支援 2) その人らしさの表現 3) 家庭的な環境づくり
6. 自己選択への支援	入居者の自己選択が図られるような環境支援	1) 入居者への柔軟な対応 2) 空間や居場所の選択 3) いすや多くの小物の存在 4) 居室での選択の余地
7. プライバシーの確保	入居者のニーズに対応して、ひとりになったり、他との交流が選択的に図れるような環境支援	1) プライバシーに関する施設の方針 2) 居室におけるプライバシーの確保 3) プライバシー確保のための空間の選択
8. ふれあいの促進	入居者の社会的接触と相互交流の促進を図る環境支援。	1) ふれあいを引き出す空間の提供 2) ふれあいを促進する家具やその配置 3) ふれあいのきっかけとなる小道具の提供 4) 社会生活を支える

Ⅲ 実施

Ⅲ－１ 取り組みの流れ

1. 平成 23 年 4 月～7 月
 - ・今年度研究についての話し合い
 - ・児玉桂子副センター長による「PEAP」勉強会の開催
 - ・「実践・施設環境づくり講座」への参加（代表職員）
 - ・「環境づくりファイル」の作成と他職員への周知

2. 平成 23 年 8 月～
 - ・5 階全職員による「PEAP」への理解
 - ・5 階全職員によるキャプションカードの作成
 - ・第 1 回研究会議

3. 平成 23 年 9 月～
 - ・6 名のご利用者の行動記録開始（環境づくり実施前）
 - ・第 2 回研究会議
 - 取り組み場所の決定（各グループリビング）
 - ・キャプションの貼り出しによる視点の共有

4. 平成 23 年 10 月～
 - ・多職種へのキャプションカードの協力依頼
 - ・職員アンケートの実施（準備期）

5. 平成 23 年 11 月～
 - ・ご家族へのキャプションカードの協力依頼と作成
 - ・多職種、ご家族によるキャプションカードの貼り出し
 - 視点の共有
 - ・各グループごとに職員によるリビングの理想的なインテリアのレイアウトや具体的な環境づくりについての意見の収集

6. 平成 23 年 12 月～
 - ・第 3 回研究会議
 - 各グループの環境づくり決定事項について確認
 - ・必要物品の見積もりと購入
 - ・新しい環境づくりの実施

7. 平成 24 年 1 月～
 - ・6 名のご利用者の行動記録（環境づくり実施後）
 - ・職員アンケートの実施

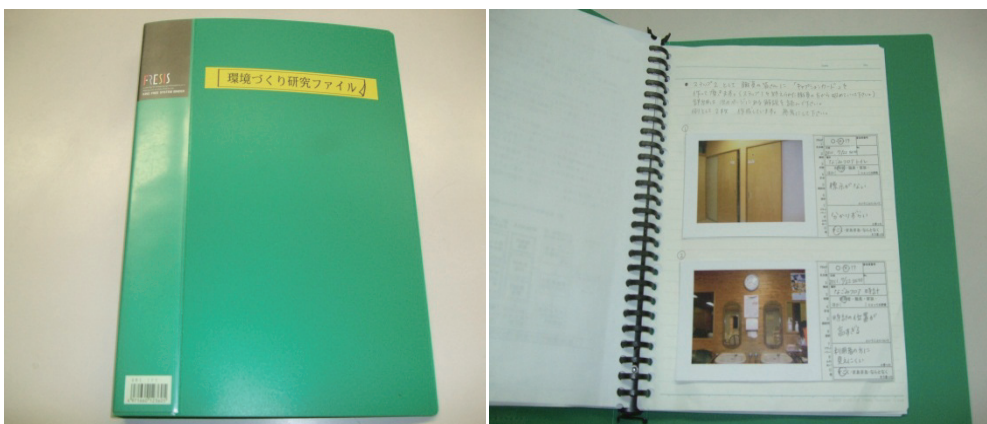
8. 平成 24 年 2 月～3 月
 - ・行動記録、アンケートの集計
 - ・キャプションカードの作成
 - ・振り返りシート

「PEAP/環境づくり」に取り組むにあたり、まず初めに児玉桂子副センター長を交えて話し合いを行った。その際、中心となって環境づくりを進めるコアメンバーの必要性和現場スタッフの「PEAP」への理解が最優先であることが分かった。そこで我々5階フロアでは代表職員1名と、生活自立度の高いご利用者が生活しているひなたグループ職員から1名、日常生活に介護を要するご利用者が生活しているなごみグループ職員から1名の計3名をコアメンバーとして位置付けることにした。また、環境づくりを進めやすくするため、「施設環境づくり支援プログラム（6ステップ）」に沿って段階を踏んで取り組んでいくことにした。

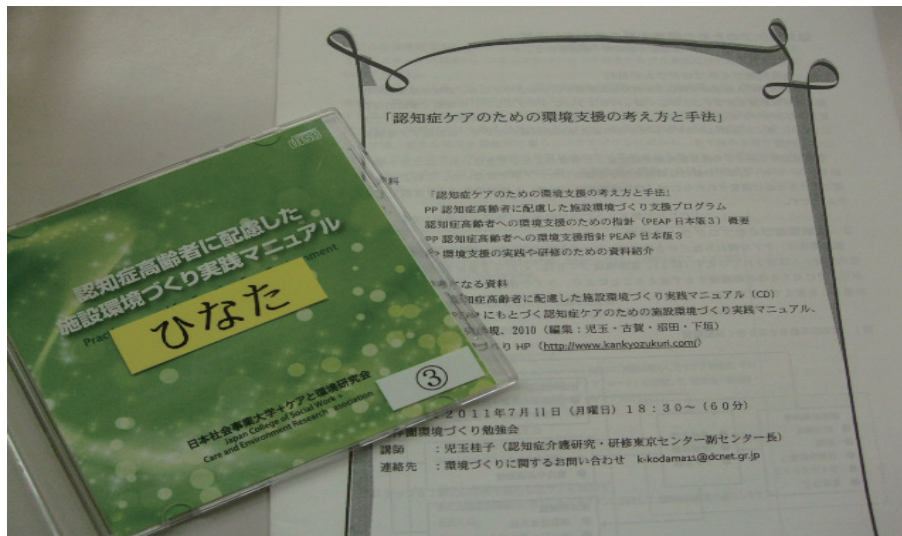
Ⅲ－２ 6ステップの取り組み

1)ステップ1 〈ケアと環境への気づきを高める〉

7月初めに児玉桂子副センター長を講師に迎え「PEAP/施設環境づくり」への理解が深まるよう勉強会を実施した。勉強会に参加し「PEAP」という指針を知ることで、現状の環境に少しでも疑問を持つきっかけになり、今後のそれぞれの施設環境づくりに繋げてもらいたいという意図もあり、今回環境づくりを行わない他施設職員や他フロア職員にも参加を呼び掛けた。その後、代表職員1名が「実践・施設環境づくり講座」に参加し、実際に「PEAP」を使用した環境づくりの演習を通して理解を深め、取り組みを習得した。後日、「環境づくりファイル」を作成し、5階フロア職員へ「PEAP」についての周知を行った。（写真1）ファイルはいつでも閲覧できるように普段連絡簿等を収納している棚に設置した。また、勉強会に参加出来なかった職員のために、環境づくりCDを購入し、「PEAP/環境づくり」の資料とともに配布し、フロア職員全員が「PEAP」の視点について共通理解が図れるように努めた。（写真2）



(写真1)

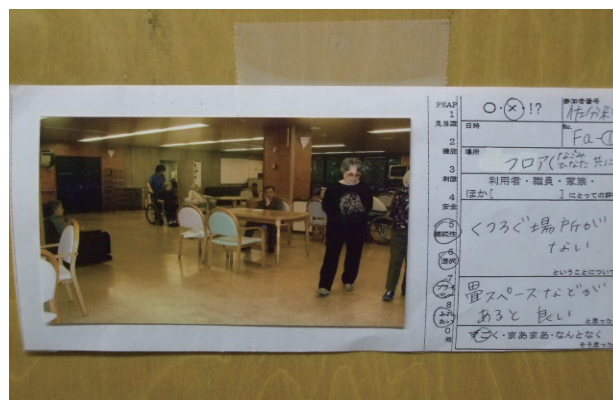
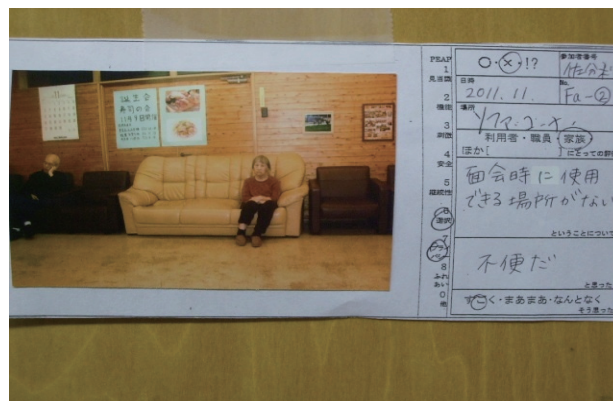


(写真2)

2)ステップ2 〈環境の課題を捉えて目標を定める〉

次にキャプションカードの作成を行った。キャプションカードとは、参加者が施設内の気になる場所の写真を撮り、その場所で何が気になったかを簡潔に記入したものである。カード状にすることで各自の気づきを視覚化し、気づきや課題を共有し、環境づくりの目標を定めることが可能になる。

〈キャプションカード〉



8/15 に第 1 回研究会議を行い、コアメンバーで自主的にキャプションカードの評価と整理を行った。5 階職員から 42 枚のキャプションカードが集まり、集まったキャプションカードを PEAP の次元に分類し、自分たちの施設環境について話し合いを行った。分類して整理することで、自分たちとは違う新たな視点に気付く事が出来た。また、ひなたグループ、なごみグループ共にデイルームについてのカードが一番多く集まり、ソファの座り難さや、椅子と机の高さ、時計や掲示物の位置などに「良くない」という評価が多く見られた。集まったキャプションカードには「×」の評価が圧倒的に多く、ご利用者が普段過ごしている現在の環境に何かしら疑問を抱いていることが明確になった。

9 月に入り、児玉桂子副センター長を交え第 2 回研究会議を行った。



前回のキャプション評価の結果を伝え、改めてキャプションカードの分類を行っていくうちに児玉桂子副センター長から「視点の偏り」を指摘された。これは同じ職種の視点でしか環境を見ていないことが原因であった。そこで、5 階フロアに携わっている看護師、管理栄養士、リハビリ職員、施設長、サービス課長、事務職員らに協力を仰ぎ、多職種によるキャプションカードの作成も行うことにした。多職種によるキャプションカードも介護職員と同じくデイルームについてのキャプションが多かったが、加湿器や献立表、パーティションの色について等、普段ご利用者と過ごしている介護職員とは違う視点で環境の問題点が挙げられていて、新たな発見でもあり、それによって「視点の偏り」も解消された。

また、フロア家族会を利用して「PEAP/環境づくり」についてご家族にも説明し、理解して頂いたうえでキャプションカードの作成にご協力を頂いた。ご家族からのキャプションでは「面会スペースの設置」と「昼スペースなどくつろぐ事が出来る場所」を求められる意見が挙げられ、多職種、ご家族の視点から更に 35 枚のキャプションカードが集まった。以上の結果を踏まえ、「目標設定シート」を作成し、環境づくりを行う場所をそれぞれのグループダイルームとし、ご利用者にとって居場所の選択が出来てくつろぐ事が出来るような環境づくりを行うことにした。



〈目標設定シート〉

目標設定シート

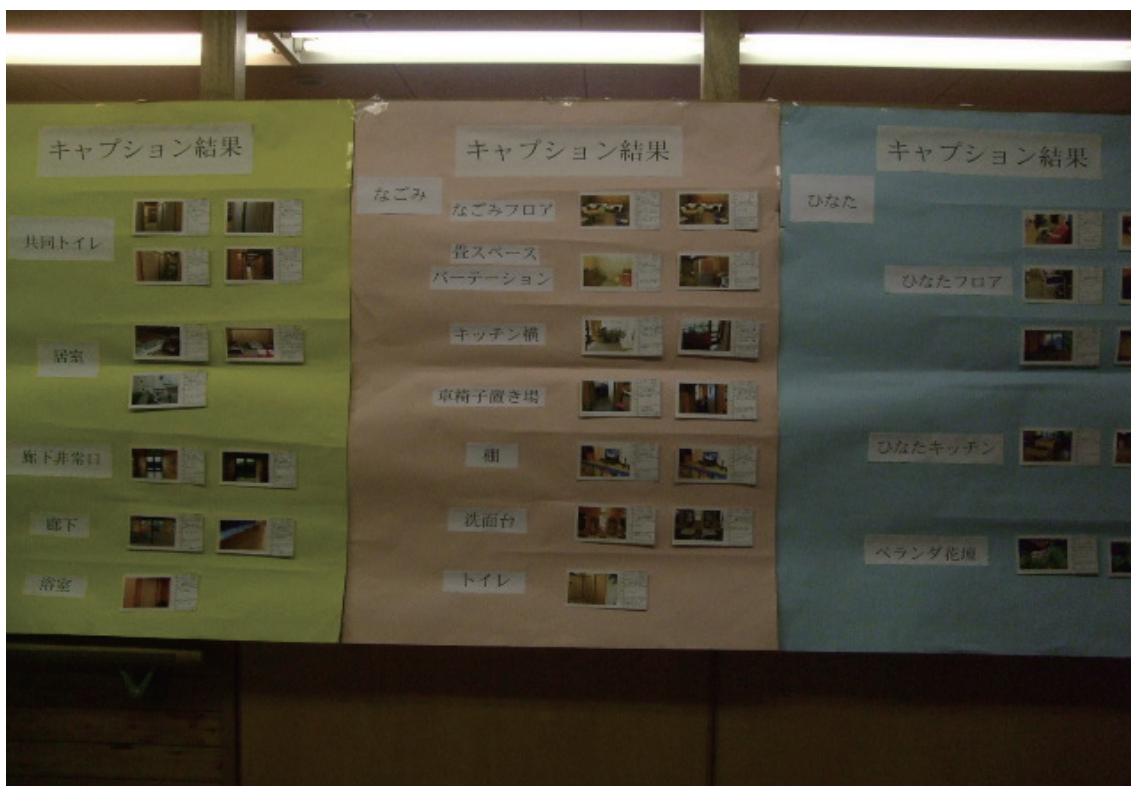
／ 環境づくりをする場所はどこですか？
環境づくりをする場所は 各グループフロア です。

この場所の選んだ理由は、利用者様が1日の中で一番長く過される場所 からです。

／ 誰のためにやるんですか？
私たちは、その場所を 利用者様 にとって、

／ で、どんな「環境」にしましょうか？
居場所の選択が出来て寛ぐことが出来る ような「環境」にします！

集まったキャプションカードをフロア入口に貼り出すことで、他職員による気づきや課題、環境づくりの目標について視点の共有ができるようにした。



3)ステップ3 〈環境づくりの計画を立てる〉

次に、ステップ2で明らかになった課題の改善と目標の実現に向けて話し合いを行った。話し合いは毎月行われる各グループ会議とコアメンバーで行う研究会議で行われ、勤務により会議に参加出来ない職員の意見も反映されるように、事前に各グループダイルームの見取り図が記されたプリントを職員全員に配布し、「ご利用者にとっての理想のダイルーム・実現したいダイルーム」について各自プランを考えて提出してもらった。

また、環境づくりがご利用者の過ごし方にどのような影響を与えるのかを調べるために、生活自立度の高いグループに在籍されている6名のご利用者の24時間の行動記録を2週間実施し、環境づくりと並行して観察を行うことにした。「PEAP」にある「暮らし方シミュレーションシート」を6名のご利用者を対象に実施し、出てきたアイデアを「環境づくりアイデアシート」で整理して環境づくりの計画の参考にした。

それまでは広いだけの空間に、主に食事をするときのテーブルと椅子(ダイニング部分)しかなく、ソファが壁に沿って置かれていても、ご利用者が好んでソファに座られる姿はあまり見受けられなかった。ほとんどのご利用者が食事をするときのテーブル席で日中を過ごされており、生活自立度の高いご利用者も居室か、食事をするときのテーブル席しか選ぶことが出来ない、そんな環境であった。話し合いの結果、ひなたグループ、なごみグループ共に①くつろぐ事が出来るリビングスペース(ソファコーナー)、②面会時に使用できる面会スペースの設置を中心に環境づくりを行うことに決定した。それによりご利用者が居場所を選択することが出来、なお且くつろぐ事が出来る環境を提供できると考えたからである。その後も各グループで話し合いを継続し、理想的なインテリアのレイアウトや具体的な環境づくりについて意見の収集を行い、以下のような具体例が挙げられた。

〈ひなたグループ〉

- ・ダイルーム時計の位置の変更
- ・キッチンの角の保護
- ・見やすい献立表ボードの設置
- ・リビングソファの設置
- ・面会コーナーの設置
- ・大人数で見る事ができるテレビの設置
- ・CDラジカセの設置
- ・共同トイレの表示位置の変更
- ・居室前にご本人写真の掲示
- ・浴室の表示
- ・グループ境目のパーテーションの色の変更
- ・ダイルーム掲示物の掲示方法の変更
- ・畳コーナーの設置
- ・配線類の処理

〈なごみグループ〉

- ・リビングコーナーの設置
- ・テレビ、オーディオ類の充実
- ・キッチン横スペースの有効活用→家族面会室として使用
- ・キッチン入口のドアの取り外し
- ・昇降機能の付いた机の設置と椅子の高さの調整
- ・グループ境目のパーテーションの色の変更
- ・壁面スペースの活用
- ・トイレ用パーテーションの設置

4)ステップ4 〈環境づくりを実施する〉

ステップ4は物理的なアイデアを目に見えるかたちにしていくプロセスで、出てきたアイデアの「実行のしやすさ」と「効果」を整理して、どのアイデアから実施していくのかを判断し、実行に移していく段階である。

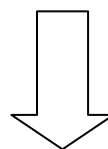
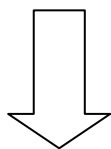
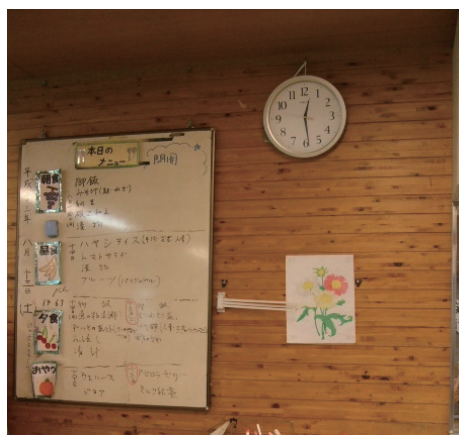
児玉桂子副センター長から「実行しやすい場所は少しずつ環境づくりを開始して下さい」との助言もあったため、まず初めに、ひなたグループ、なごみグループ共に「ダイルーム時計位置の変更」を行った。すぐに取り掛かることができ、効果も期待できたからである。今までダイルームの時計は天井に近く壁の高い位置に掛けられていた為、椅子に座って過ごされるご利用者にとっては大変見えづらく分かりにくいものであった。その為、職員に時間を尋ねられるご利用者も多くいらっしやしたが、時計位置を変更してからは「見やすくなった」と直接ご利用者意見も聞かれるほど効果があった。「たった30cm位置を下げただけでご利用者が今までよりも生活がしやすくなる」ことに気付き、改めて環境の与える影響の大きさを実感させられることになった。

次に、ひなたグループでは「キッチン角の保護」「見やすい献立表の設置」「配線の処理」を続けて行った。キッチンは保護テープを貼ることで多少見栄えは悪くなるが、ご利用者がキッチン角にぶつかって怪我をする危険は防ぐことができた。キッチン後ろに設置されていた献立表ボードは、食事席からは少し距離があり見えづらかった。しかし、ご利用者のお一人がその献立表に献立を書くことを日課にされているため、そのまま残し、新しくホワイトボードを購入しご利用者の目に付きやすい位置に2つ目の献立表ボードを設置した。目に付きやすい位置に設置したことで、ご利用者同士で昼食や夕食の献立について会話される機会が増え、ご利用者間のコミュニケーションにも役立っている。カラオケ機材の後ろ側は配線が入り組んでおり、壁とモニターの間が離れているため、そこにご利用者が入り込んでしまわれることもあり危険であった。そこでカラオケ機材の位置をずらし、壁に寄せることで配線の危険を解消することができた。

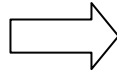
その後も「ゆ」と書かれた暖簾を浴室扉前に掛けることで「浴室の表示」を行い、共同トイレの「お手洗い」の表示を20cm下げ、ご利用者に「浴室」や「トイレ」の理解をして頂けるよう努めた。

なごみグループではキッチン横の空きスペースをご家族が来られた時の面会室にするため、空きスペースの片付けを行い、グレーで暗い印象の棚と扉をカラースプレーでベージュに塗り変えた。また、広く開いた壁面には絵画やご利用者の集合写真を飾り、壁面スペースの充実に取り組んだ。

〈時計位置の変更〉



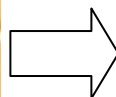
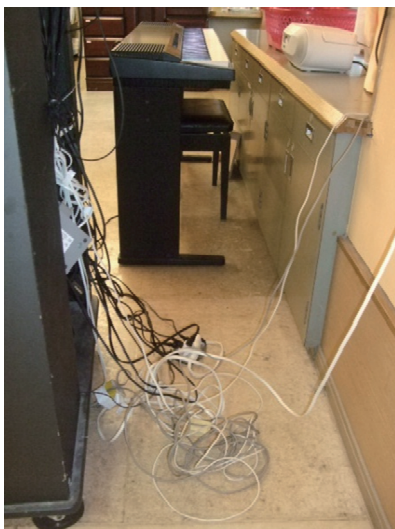
〈キッチンの角の保護〉



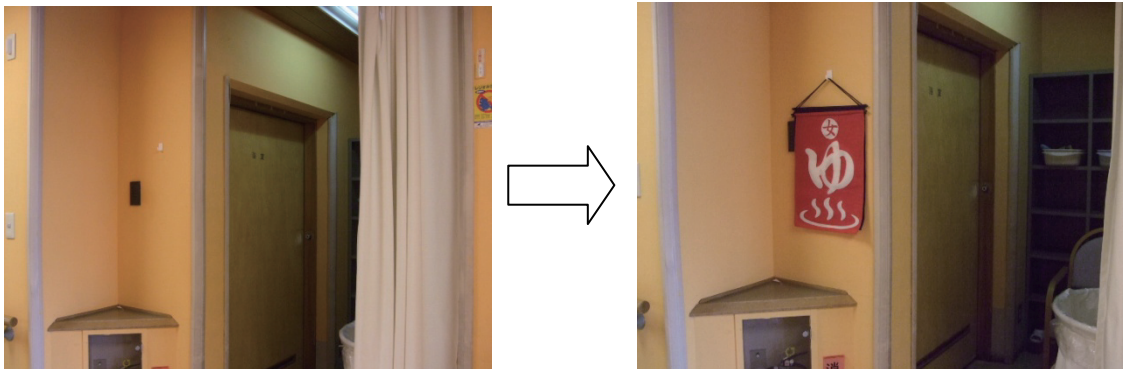
〈新しい献立表の設置〉



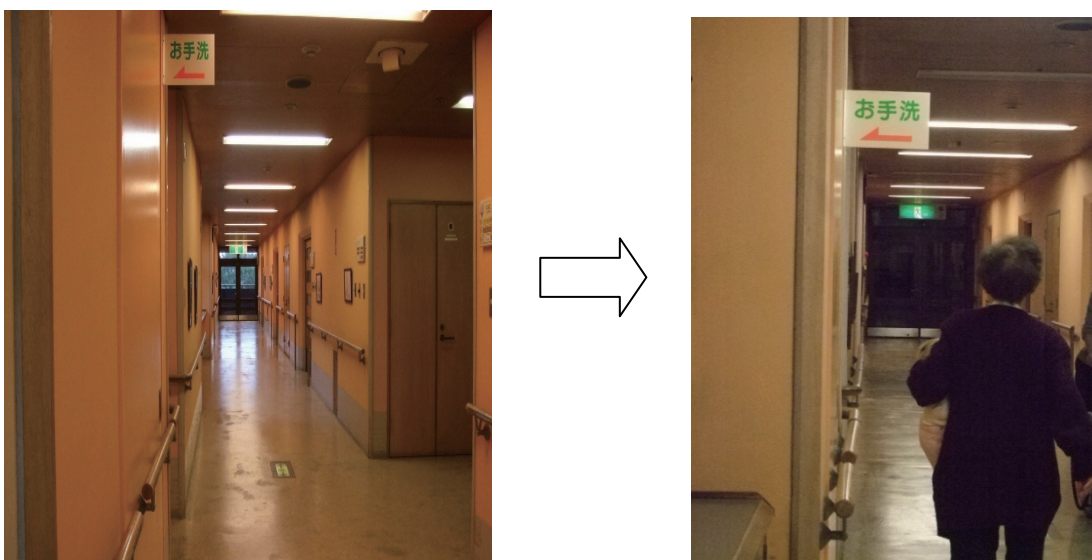
〈カラオケ機器裏側の配線処理〉



〈浴室の表示〉



〈トイレの表示〉



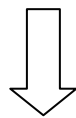
〈なごみ壁面スペース〉



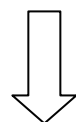
〈なごみキッチン横スペース〉



グレーで暗い印象を



ベージュに塗り替え



面会室として整備した

少しずつ実施しやすい場所の環境づくりを行っていきながら各グループで話し合いを重ね、「リビングスペース」と「面会スペース」のレイアウトや購入家具類について更に計画を練っていった。

ひなたグループでは今回は畳スペースの設置は見送ることにした。1年前にも「昔から慣れ親しまれた環境を作って差し上げたい」との思いからダイルームに畳スペースを設置したことがあった。しかし、普段テーブル席で過ごされることが多いご利用者にとって畳への座りこみや立ち上がりは膝に負担がかかってしまう為かえって座りにくく、ご利用者が自ら好んで畳スペースに向かわれることがあまり見られず、昔から慣れ親しんだ環境が必ずしも現在のご利用者にとって良い影響を与えるとは言えないのだと痛感させられる結果となった。また、ご利用者が畳につまずいて転倒されたこともあり、安全性を考えて畳スペースは撤去したのだった。1年前の経験を踏まえ、今回の環境づくりでは現在の利用者の身体的負担や生活習慣を考慮して、新しくソファを購入し、くつろぐことができるソファリビングを作ることで職員の意見は一致した。また、キッチン前にも面会時使用できるソファコーナーを設置することで「広いだけで何もない空間」をリビングとダイニングの2つのスペースに分け、ご利用者がリビング、ダイニング、ソファコーナー（面会スペース）を選んで過ごすことが出来る環境づくりを行うことにした。更にひなたグループでは、グループ会議の際に環境づくりを行う上でのメリットとデメリットを挙げ、職員間での共通意識を図った。

〈メリット〉

- ・「ダイニング」と「リビング」との境界線ができる
- ・ご利用者のくつろげるスペースができる
- ・ご家族、ご利用者が周囲に気を使わず談話できる場所ができる
- ・「ダイニング」「リビング」「居室」とご利用者が選択して過ごす場所が増える
- ・食事席が今までよりもまとまる為、食事の見守りがしやすくなる
- ・面会後にご家族が帰られる際、職員がダイルーム不在の時はソファに座ってゆっくりと待つ事が出来る

〈デメリット〉

- ・観葉植物の異食があるかもしれない
- ・ご利用者が食事席を今までよりも狭く感じられるかもしれない
- ・キッチン前にソファスペースを作る事でキッチンが活用しにくくなるかもしれない

一方なごみグループでは殆どの職員から「キッチン横スペースを面会室にしたい」との希望があり、ダイニングセットを購入して面会室の整備を行うことで意見は一致していた。キッチン横スペースはテラスへの出入り口があるため、ご家族が面会に来られた際、気兼ねなくご利用者とテラスに出ることが出来るのが理由の一つである。また、なごみダイルームもひなたダイルーム同様食事をするためのテーブル席と3人掛けソファが1つ置いて

あるだけで、ご利用者がゆっくりとくつろぐことが出来る環境は整っていなかった。そこでダイルームの一角にソファリビングを作り、ご利用者がくつろぐことが出来る環境づくりを行うことにした。

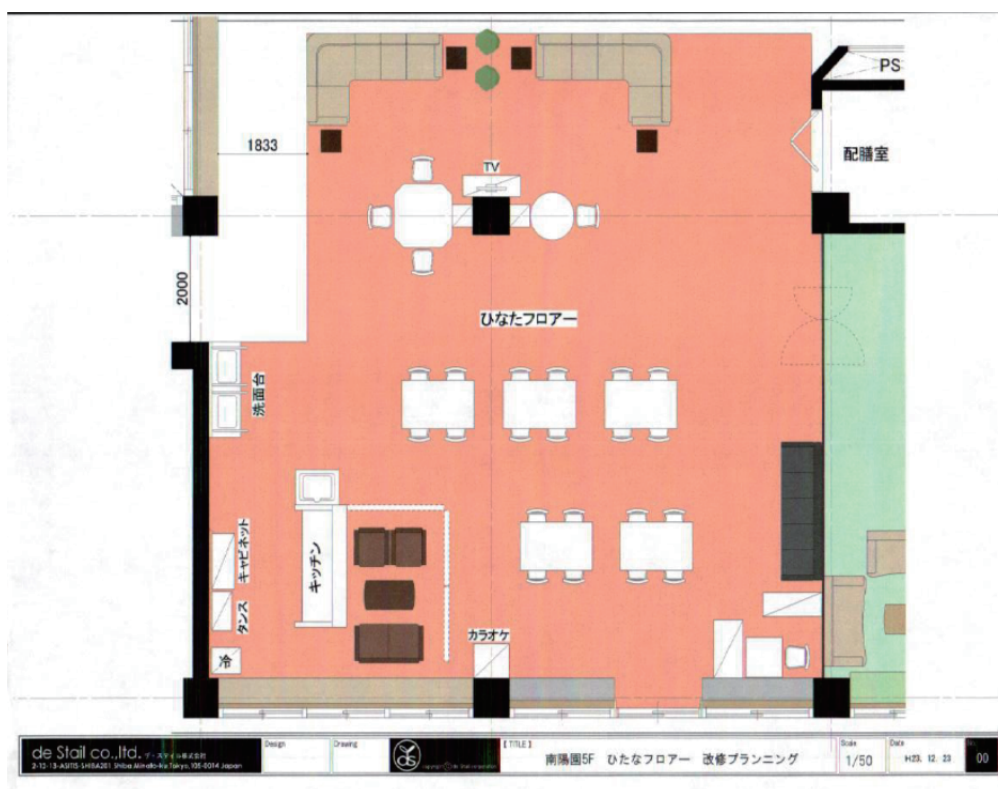
11月末の研究会議では、今回実施する「リビングスペース」と「面会スペース」の環境づくりについて児玉桂子副センター長よりいくつかの提案と注意点が挙げられた。

- ・テレビを見る、新聞を読むなど静かに過ごすことができるスペースの確保
- ・テレビはサイドボード等を利用して見やすい位置への設置
- ・目隠しをすることができるロールスクリーンの使用
- ・組み合わせて使用することができるL字ソファの使用
- ・ソファの強度について
- ・購入家具類の色はベージュ系で
- ・実際に新しいソファや家具を置くことでスペース的に狭くないのか？
- ・面会スペースではご家族がご自分でお茶の準備ができるなど、気を使わずに有効的に活用できると良い。

そして「最終的に“何のために環境づくりを行うのか” 目的を見失わずに取り組んでいくように」との助言があった。

児玉桂子副センター長の助言を受けて、最終的に決まった環境づくりの計画案（見取り図）は以下の通りである。

〈ひなたグループ〉



なごみグループ



ひなたグループは組み合わせて使用できる L 字ソファを 2 組設置し、その両サイドにチェストを置いてソファに座りながらコーヒーを飲んだり、テレビや雑誌を見ながらくつろぐことが出来るリビングスペース作りと、キッチン前に以前からダイルームで使用していたソファセットを設置してソファスペースを作り、天井にロールスクリーンを取り付けご家族の面会時にはプライバシーが保てるように配慮する作りにした。

なごみグループでは小さめのダイニングセットを購入し、キッチン横スペースを面会室として使用できるようにすることと、3人掛けソファ 2 組を設置し、テレビを見ながらゆったりとくつろげるリビングスペース作りを行うことになった。

また、両グループを隔てているパーテーションの壁紙をグレーからベージュに変え、ダイルーム全体を明るく印象づけるようにした。

12月末には家具類の搬入が行われ、両グループの「リビングスペース」と「面会スペース」の環境づくりが実施された。

5)ステップ5 〈施設環境づくりを暮らしとケアに活かす〉

ひなたグループに新しく出来たりリビングは我々の想像以上にご利用者の生活になじむ結果となった。食後や日中、ご利用者が自らソファに座られテレビを見て過ごされたり、チェスト引き出しに入っている雑誌を取り出して読まれたり、ご利用者同士でソファに座って談話されるなど生活のスペースとして受け入れられている。また、ご家族が来園された際にキッチン前の面会スペースにご案内しロールスクリーンを降ろすことで、他利用者や職員の眼を気にすることなくゆっくりとご家族で過ごして頂ける空間となった。面会スペースを希望されていたご家族に感想をお聞きすると「周りの方の眼を気にせず面会できるので良かったです。」と話された。面会スペースは普段はもう1つのソファスペースとしても利用されていて、お一人で過ごされることが好きなご利用者が好んで座られる場所になっている。また、寝不足気味のご利用者や傾斜が見られるご利用者がいらっしゃる時など、食事席ではなくソファに座って頂くなど、職員も新しい環境をケアに活かす事が出来ている。

以上のことから生活自立度の高いご利用者が過ごされているひなたグループでは目標としていた「ご利用者が居場所の選択が出来てくつろぐことが出来る」環境づくりを行い、満足のいく結果を得ることが出来た。

一方なごみグループではキッチン横スペースが整備され、明るく温かみのある面会室を作ることが出来た。また、ダイルームには3人掛けソファを2組購入しくつろぐことが出来るソファリビングが設置された。しかし、新しく環境づくりが実施されたにも関わらず相変わらずご利用者は食事席で過ごされている状況が続き、ひなたグループとは対照的になごみグループではなかなか新しい環境を生活に取り入れることが出来ないうでいた。そこでなごみ職員（7名）を対象にアンケートを行い、環境づくりの改善点をグループ全体で考えてみた。

1. 面会室の活用について、活用できていると答えた職員は0名で、活用できていないが4名、どちらともいえないが3名だった。活用できていない理由に「職員がご家族面会時に誘導していない」「冬は寒そうな感じがする」「狭い。キッチンと隣接していて職員の出入りがある為誘導を遠慮してしまう」「面会が少なく、ご家族に声かけしても遠慮されてしまう」等が挙げられた。
2. ソファスペースの活用については、活用できていると答えた職員は3名、出来ていないが1名、どちらともいえないが3名だった。活用できていない理由に「生活の場から離れている」「スペースが狭く感じられ躊躇してしまう」「死角になって見守りしづらい」との意見が挙げられた。

以上のアンケート結果を踏まえて今後に向けていくつかの改善点が挙げられた。

- ・ご家族にどこの場所で面会したいか伺う
- ・ひなたグループのご家族にも利用してもらおうと良い
- ・ソファスペースをもう少し広く取ってみる

- ・ソファの位置や場所の変更を行い、死角をなくし見守りがしやすいようにしたい
- ・ソファスペースは職員が積極的にご利用者を誘導すれば良い

6)ステップ6 〈環境づくりを振り返る〉

実施内容と取り組みの理由を職員全員で理解し、継続的に取り組むには「実践の振り返り」が不可欠である。「振り返りシート」を実施することで各ステップの役割や流れ、ご利用者と環境との関係への理解が深まる。ステップ6では各グループで「振り返りシート」を実施し、取り組んできた環境づくりについて振り返りを行い今後の課題を見出していった。また、環境づくり実施後に改めて5階フロア職員にキャプションカードを作成してもらい、実施前と実施後の視点の変化を比べてみた。

振り返りシート① 〈フロアパーテーション〉

結果：ダイルルームパーテーションの壁紙の貼り替えを行いグループリビング全体が明るく気持ちのよい雰囲気になった。

課題：パーテーションに絵画やご利用者の写真等を飾り、美観スペースとして活用する。

環境づくり振り返りシート					
					24年 2月 1日
1. 課題の整理	カード NO	場所	評価	ということについて	と思った
(キャプション評価)	他-①	グループ リビング	×	パーテーションの色	暗い
(課題の整理) ひなたグループとなごみグループの境目のパーテーションの色がグレーでグループリビングの雰囲気を暗くしている。					
2. 暮らしのイメージ	グループリビングの雰囲気が明るくなり、気分が晴れる。				
3. 目標設定	ダイルルーム全体の雰囲気を明るくし、気持ちよく過ごせる環境にする。				
4. 環境づくりアイデア	・パーテーションの壁紙の変更を行う。				
5. 環境づくりの内容	①現状のグレーの壁紙を剥ぐ。(職員と利用者で共同作業で行う) ②壁紙が素人ではきれいに剥がせなかった為、専門業者に頼み、貼り替えを行う。 ③新しく貼る壁紙は職員で相談してベージュに決める。				
6. 評価	PEAP		事 前	事 後	環境づくり後にどのように変わったかを記す
PEAP:環境づくりの事前・		1. 見当識			

事後の環境をPEAPの次元により評価する。関連しない次元は空けておく。 ○：よく支援 ×：支援が不足 !?:(良いとも悪いとも言えない)	2. 機能的な能力			
	3. 刺激の質と調整	×	○	ダイルームがベージュ系で統一感が出た。
	4. 安全と安心			
	5. 生活の継続性	×	○	ダイルームが明るい雰囲気になり、家庭的な雰囲気に近づいた。
	6. 自己選択			
	7. プライバシー			
	8. ふれ合いの促進			
	利用者の声	H.K 様「壁紙の質感も良いし色も良いね。変えてもらって良かったよ。」		
7. 今後の課題	パーティションに絵画や利用者の作品、写真などを飾り、美観スペースを充実させる。			

振り返りシート②〈ひなた面会スペース〉

結果：ご利用者が選択して過ごすことのできる居場所となった。また、ご家族が周囲を気にせず面会できるスペースとなった。

課題：ご家族が隣接しているキッチンを自由に利用し、職員への気兼ねがなく過ごせる場の提供が必要。

環境づくり振り返りシート					
24年 2月 1日					
1. 課題の整理 (キャプション評価)	カード NO	場所	評価	ということについて	と思った
	Fa-②	ソファコーナー	×	面会時に使用できる場所がない	不便だ
(課題の整理) ご家族が面会に来られても、ゆっくりと家族だけで過ごせる場がない。					
2. 暮らしのイメージ	日中：①面会時に家族とゆっくり過ごす事が出来る ②仲の良い利用者同士でくつろぐことが出来る ③1人でゆっくりすることができる				
3. 目標設定	利用者にとって「居場所の選択が出来てくつろぐことが出来る」ような環境にする				

4. 環境づくりアイデア	<ul style="list-style-type: none"> ・キッチン前にソファセットを設置して面会スペースを作る ・ロールスクリーンを使用してプライベート空間を作る 				
5. 環境づくりの内容	<p>①元々フロアで使用していたソファセットをキッチン前に設置し、ソファに合わせたリビングテーブルを購入し、キッチン前に応接ソファスペースを作る。</p> <p>②ソファスペースが目隠し出来るように天井にロールスクリーンを設置する。 (ご家族面会時にプライバシーを保つ)</p> <p>③隣接するキッチンの角に保護テープを貼る。</p>				
6. 評価 PEAP: 環境づくりの事前・事後の環境をPEAPの次元により評価する。関連しない次元は空けておく。 ○: よく支援 ×: 支援が不足 !?: (良いとも悪いとも言えない)	PEAP		事前	事後	環境づくり後にどのように変わったかを記す
	1. 見当識				
	2. 機能的な能力		×	ご家族と利用者が職員に気を使わずキッチンを利用してお茶を入れたりすることは出来ていない。	
	3. 刺激の質と調整				
	4. 安全と安心		○	キッチンの角に保護テープを貼った。	
	5. 生活の継続性		△	家庭的な雰囲気になったがお茶を入れたり使いこなされてはいない。	
	6. 自己選択	×	○	1人で過ごしたい利用者が好んで座られる場になっている。	
	7. プライバシー	×	○	ご家族の面会時にプライベート空間を作る事が出来るようになった。	
	8. ふれ合いの促進		○	利用者同士で過ごされる場になった。	
利用者 の声	〈ご家族の声〉 「ありがとうございます。他の方を気にせずゆっくりと面会ができます。」				
7. 今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ご家族面会時に職員に気を使うことなく、自らキッチンを使用してお茶を入れたりする環境づくりが必要。 				

振り返りシート③〈ひなたリビング〉

結果：ソファリビングが出来たことでご利用者が選択して過ごす居場所ができた。また、ご利用者がテレビを見ながらゆっくりとくつろぐことが出来るようになった。

課題：ソファが動いてしまう為滑り止めなどの対策が必要。

環境づくり振り返りシート					
24年 2月 1日					
1. 課題の整理 (キャプション評価)	カード NO	場所	評価	ということについて	と思った
	⑱⑳	ひなたフロア	×	くつろぐ場所がない	畳スペース等があると良い
(課題の整理) 広いだけの空間に食事用のテーブルと椅子、壁に沿ってソファが置いてあるだけで、利用者がくつろぐことが出来る環境が整っていない。					
2. 暮らしのイメージ	朝：①テレビが見られる②朝食前にゆっくりと過ごせる 日中：①テレビが見られる②食後にゆっくりと過ごせる 夜：①テレビが見られる②夜更かしが出来る③食後ゆっくりと過ごせる				
3. 目標設定	利用者にとって「居場所の選択が出来てくつろぐことが出来る」ような環境にする				
4. 環境づくりアイデア	・ソファセットの購入 ・食事席スペースとリビングスペースを分ける				
5. 環境づくりの内容	①組み合わせて使用できるL字型ソファを2組購入し、設置する。 ②大画面テレビを購入し、リビング中央のサイドボード上に設置する。 ③ソファの両サイドにチェストを置き、テーブルとしても使用する。 ④ソファとソファの間に観葉植物を置き、自然な目隠しが出来るようにする。				
6. 評価 PEAP: 環境づくりの事前・事後の環境をPEAPの次元により評価する。関連しない次元は空けておく。 ○：よく支援 ×：支援が不足	PEAP		事前	事後	環境づくり後にどのように変わったかを記す
		1. 見当識		○	食事とくつろぐ場がはっきりと認識できるようになった。
		2. 機能的な能力		○	ソファの背もたれが高く安定している。
		3. 刺激の質と調整		○	今までなかった大画面のテレビが設置され多くの利用者が自由にテレビが見れるようになった。
		4. 安全と安心		△	L字型のソファで安全に移動がしやすい利点があるが、少しずつ動いてしまいソファとソファの間に

！？:(良いとも悪いとも言えない)					隙間が出来てしまう。
	5. 生活の継続性	×	○		ソファリビングでテレビを見ながらくつろげるようになった。
	6. 自己選択	×	○		居場所の選択が出来ようになった。
	7. プライバシー	×	!?		観葉植物が移動された為、プライバシーは保たれていない。
	8 ふれ合いの促進	×	○		利用者同士のコミュニケーションの場となっている。
利用者 の声	H.M様「いいね。座り心地も良いよ。」 U.A様「ゆっくり出来てテレビ見れるからいいね。」 N.H様「良いソファだね。高かったでしょ？」				
7. 今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ソファとソファの間に観葉植物を置いて自然な目隠しになるようにしてみたが、「死角になってしまい危険」という意見が多く聞かれた為、壁際に外している。その為、職員も利用者もソファとソファの間を通路として利用してしまっている。利用者がくつろいでいる空間を横切り、通路としているのは問題である。 ・ソファが動いて隙間が開いてしまう為、ソファの底に滑り止めを付ける。 				

振り返りシート④〈なごみキッチン横スペース〉

結果：活用されていないスペースを整備してご家族とご利用者に喜んでもらえる面会室を作った。

課題：ご家族が遠慮されたり、職員の意識が低く活用がされていない。職員が声かけしながら誘導するなど対応が必要。

環境づくり振り返りシート					
24年 2月 1日					
1. 課題の整理 (キャプション評価)	カード	場所	評価	ということについて	と思った
	NO	なごみキッチン横	×	スペースの有効利用が出来ていない	もっと有効活用出来る
(課題の整理) ただの空間になっているスペースを活用したいという意見が多く聞かれるも、現状は荷物置き場になっていて有効活用が出来ていない。					
2. 暮らしのイメージ	日中：利用者のご家族が気兼ねなく談話したりくつろぐことができる。				
3. 目標設定	利用者と家族にとって「ゆっくりと面会できる」環境にする。				

4. 環境づくりアイデア	なごみキッチン横スペースの不要な荷物を片付け、テーブルと椅子を設置して面会室を作る。				
5. 環境づくりの内容	①なごみキッチン横スペースの片付けを行う。 ②グレーで暗い雰囲気の間と扉をカラーズプレーでベージュに塗り替える。 ③ダイニングセットと食器棚を購入し、設置する。 ④ご家族に面会室があることを伝え、案内する。				
6. 評価 PEAP:環境づくりの事前・事後の環境をPEAPの次元により評価する。関連しない次元は空けておく。 ○:よく支援 ×:支援が不足 !?: (良いとも悪いとも言えない)	PEAP		事前	事後	環境づくり後にどのように変わったかを記す
		1. 見当識			
		2. 機能的な能力			
		3. 刺激の質と調整			
		4. 安全と安心			
		5. 生活の継続性		○	家庭的で温かな雰囲気のため、利用されたときに落ち着く。
		6. 自己選択	×	×	ご家族が遠慮されてしまう。
		7. プライバシー	×	○	面会時プライバシーが保てる。
	8. ふれ合いの促進	×	△	ご家族と利用者のふれあいがもてる。しかしご家族が遠慮され活用できていない。	
利用者 の声	〈ご家族の声〉 「わざわざいいです。」「ここで構いません。」と面会室の使用を断られる。				
7. 今後の課題	・ご家族が来園されたら、「ご案内します」とお伝えし利用者とともに誘導する。				

振り返りシート⑤〈なごみフロア〉

結果：日中、ご利用者がくつろぐことが出来るソファリビングが出来た。

課題：オーディオ類を充実させ、もっとくつろぎやすい環境にする。介助が必要なご利用者を職員がソファに誘導し、くつろいで頂けるようにする配慮が必要。

環境づくり振り返りシート					
24年 2月 1日					
1. 課題の整理 (キャプション評価)	カード NO	場所	評価	ということについて	と思った
	Fa-①	なごみフロア	×	くつろぐ場所がない	畳スペースなどくつろぐ場所があると良い

	(課題の整理) なごみフロアには洗面台横にソファが置かれているが、利用者がくつろげる場にはなっていない。				
2. 暮らしのイメージ	朝：①テレビが見られる②ベランダの草花が観賞できる 日中：①テレビが見られる②くつろぐことが出来る③気の合う人と話せる				
3. 目標設定	利用者にとって「ゆっくりとくつろぐことが出来る」環境にする				
4. 環境づくりアイデア	食事用のテーブルと椅子しかないフロアの一面にソファスペースを設置する。				
5. 環境づくりの内容	①ソファセットとテーブルを購入し、なごみフロアの一面にソファリビングを設置する。 ②テレビも設置して、コーヒーを飲んで頂くなどゆっくりとくつろげる環境を作る。 ③食事の時以外は利用者をソファに誘導し、くつろげるスペースがある事を認識して頂く。				
6. 評価 PEAP:環境づくりの事前・事後の環境をPEAPの次元により評価する。関連しない次元は空けておく。 ○:よく支援 ×:支援が不足 !?: (良いとも悪いとも言えない)	PEAP		事 前	事 後	環境づくり後にどのように変わったかを記す
		1. 見当識			
		2. 機能的な能力			
		3. 刺激の質と調整		○	日中、テレビを見て過ごせるようになった。
		4. 安全と安心			
		5. 生活の継続性	×	○	温かく家庭的な雰囲気が出来ている。リラックス出来ている。
		6. 自己選択	×	○	数人の利用者が好んで自ら座られている。
		7. プライバシー	×	×	
	8. ふれ合いの促進	×	○	利用者同士のコミュニケーションが増えた。	
	利用者 の 声				
7. 今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・テーブルが十分に活用できていない。 ・DVD やビデオ等が見れないため、機器類を設置して見れるようにする。 ・介助が必要な利用者もソファを活用できるような配慮が必要。 				

振り返りシート⑥〈なごみ共同棚〉

結果：棚の色を焦げ茶色に塗り替えたことで全体の色調と合い統一感がでた。

課題：引き出しや棚の中の備品の整理。

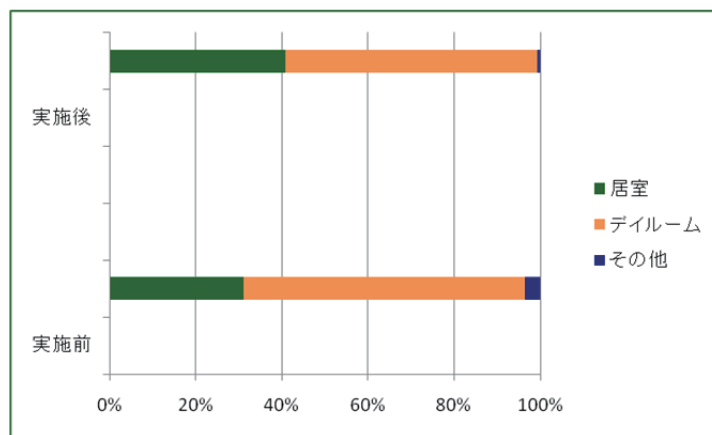
環境づくり振り返りシート					
24年 2月 1日					
1. 課題の整理 (キャプション評価)	カード	場所	評価	ということについて	と思った
	NO	なごみ棚	×	フロア全体の色のバランス	調和がとれていない
(課題の整理) フロア環境づくりを実施して統一感のある家具類の設置を行ったが、棚の色が青と緑で浮いて見え、全体の色調と合っていない。					
2. 暮らしのイメージ	フロア全体がスッキリとして違和感を感じずに過ごす事が出来る。				
3. 目標設定	利用者が落ち着いて過ごせる環境を作る。				
4. 環境づくりアイデア	<ul style="list-style-type: none"> ・棚の色を塗り替える ・棚にカーテンをかけて中が見えないようにする 				
5. 環境づくりの内容	①カラースプレーで棚の色を焦げ茶色に変える。 ②棚にカーテンを取り付け、中の荷物類が見えないようにする。				
6. 評価 PEAP:環境づくりの事前・事後の環境をPEAPの次元により評価する。関連しない次元は空けておく。 ○:よく支援 ×:支援が不足 !?: (良いとも悪いとも言えない)	PEAP		事前	事後	環境づくり後にどのように変わったかを記す
		1. 見当識		○	
		2. 機能的な能力			
		3. 刺激の質と調整	×	○	統一感が出た。
		4. 安全と安心			
		5. 生活の継続性		○	生活感のある空間作りが出来ている
		6. 自己選択			
		7. プライバシー			
	8. ふれ合いの促進				
利用者 の声					
7. 今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・カーテンの開閉がしにくい ・引き出しの中の整理を行う 				

IV 利用者行動調査

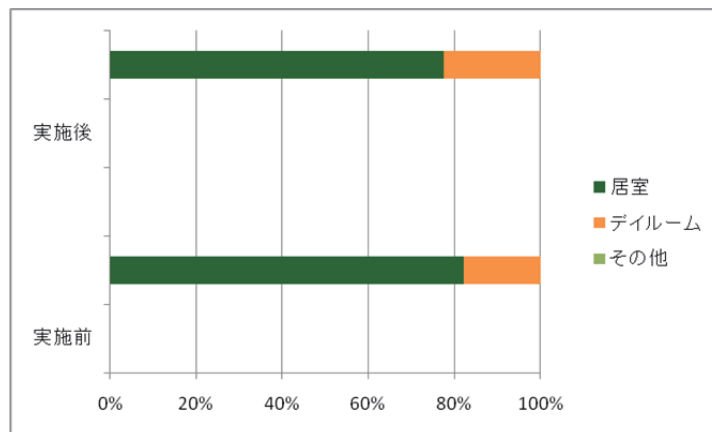
生活自立度の高いひなたグループご利用者の中から日中居室に戻られるご利用者6名を選出し、6名のご利用者の24時間行動観察記録を2週間行い、環境づくり実施前と実施後でダイルームへの滞在時間に変化が見られるかを比較調査した。行動観察記録は1時間ごとに区切られており、「居室」「ダイルーム」「その他」の場所の記載と「何をされているか」具体的な行動の記入、周辺症状の有無を記入できるもので実施した。

A様 男性

日中（6：00～19：00）



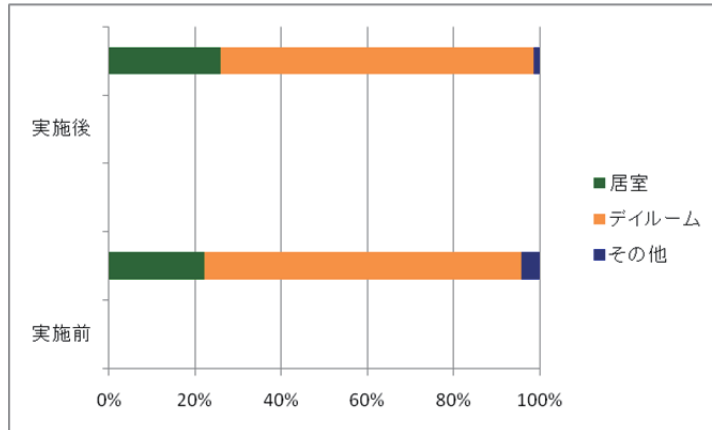
夜間（19：00～6：00）



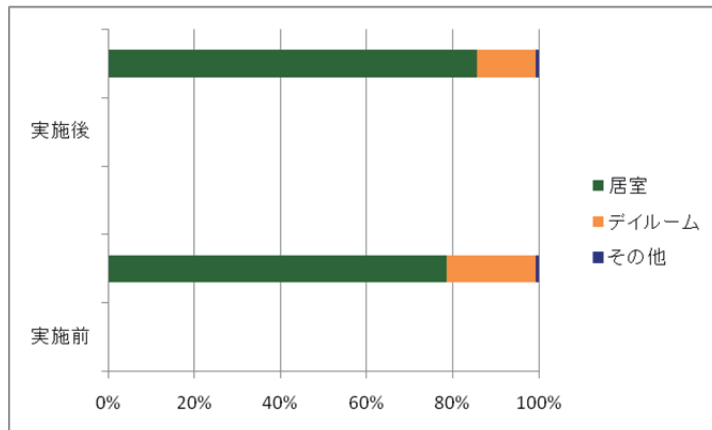
ダイルームにご自分の指定席があり、比較的ダイルームで過ごされていることが多いが、幻覚や幻聴があり日中は食事前後になると大声を出して落ち着かなくなられる。夕食後、19時過ぎには居室に戻られ入眠され、午前1時～2時頃起きてこれら1～2時間ダイルームのご自分の指定席でテレビを見て過ごされている。行動観察記録を比較してみると環境づくり実施前より実施後の方が居室滞在時間が長くなっているが、環境づくり実施後は夕食後ソファリビングに座ってゆっくりテレビを見られたり、ダイルームで過ごされる時間が充実された為か就寝時間が30分程度遅くなり、大声を出される時間が昼食前後に限定されてきている。また、夜間帯起きてこられる回数が以前より減少している。

B様 男性

日中（6：00～19：00）



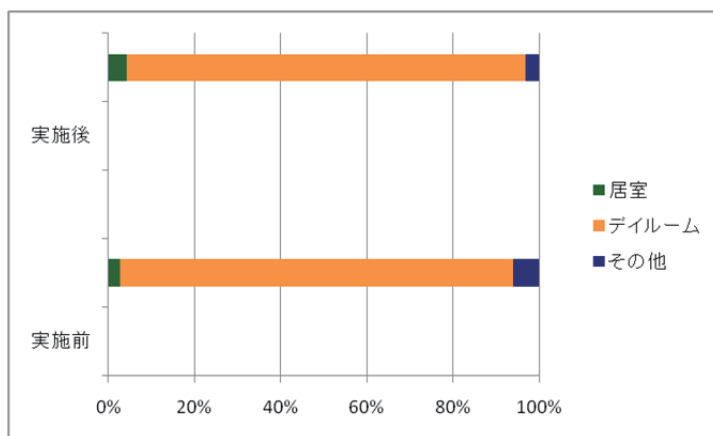
夜間（19：00～6：00）



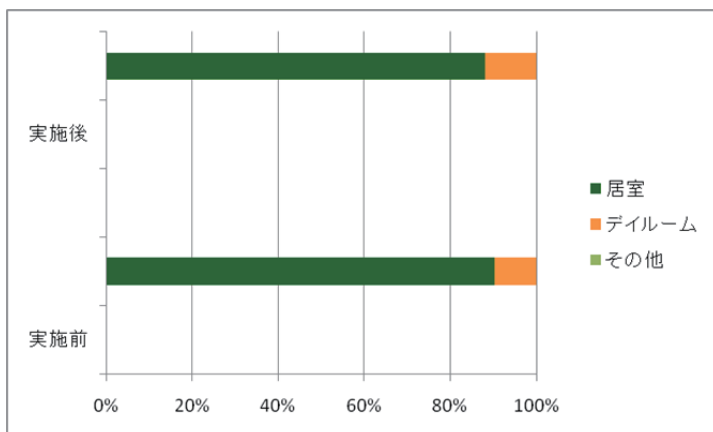
デイルームではご自分の指定席があり、日中はご自分の席で読書をされたり、気の合うご利用者と会話され過ごされている。また、食後は居室で休まれている。認知症による周辺症状等は目立って見られる方ではないが、夜間帯眼を覚まされて起きて来られることが多くみられる。環境づくり実施前と実施後を比較すると居室で過ごされる時間が増えているが、夕食後ソファリビングで気の合うご利用者と談話して過ごされたり、テレビを見て過ごされ入眠前に穏やかな時間を過ごされている。環境づくり実施後は夜間帯起きて来られる回数が減少している。

C様 女性

日中（6：00～19：00）

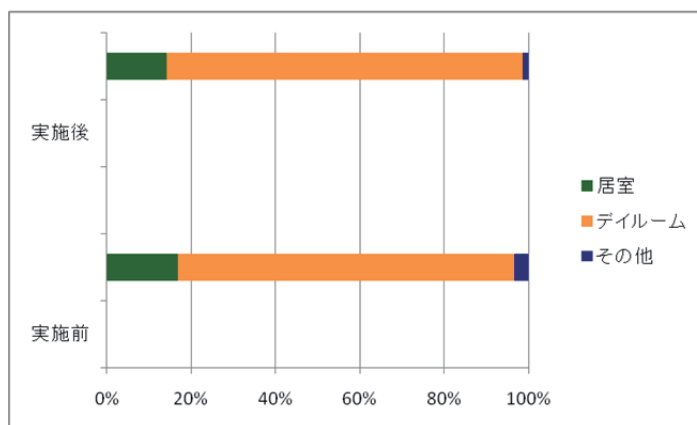


夜間（19：00～6：00）

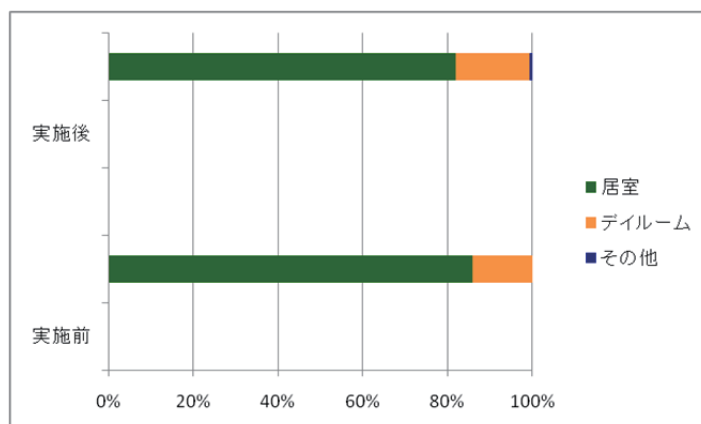


日中は気の合うご利用者とデイルームで過ごされたり、出口を探して廊下を徘徊されたり居室で横になって過ごされている。環境づくり実施前と実施後で比較しても滞在時間にあまり大きな変化は見られない。C様は環境づくり実施前から気の合うご利用者と食後、ソファに座って過ごされていた為、環境づくりがC様に与えた影響は低いと思われる。

D様 女性 日中（6：00～19：00）



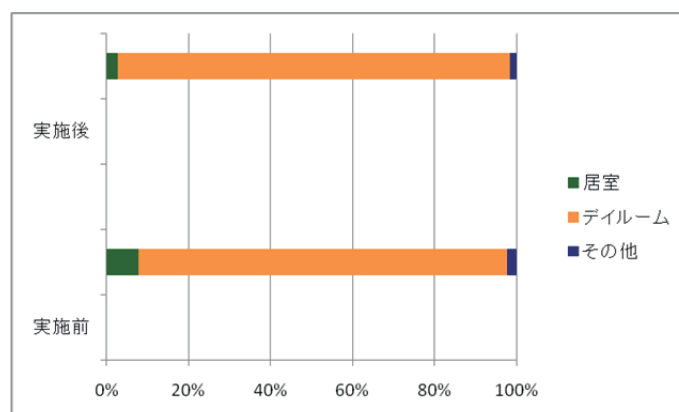
夜間（19：00～6：00）



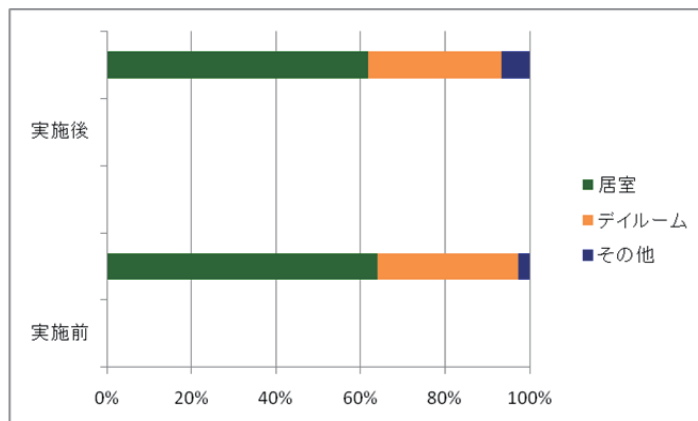
日中はご自分の居室に戻ってタンスの衣類整理をされたり、お化粧をされ身だしなみを整えられたりと、居室がご自分の居場所となっておりますご利用者である。環境づくり実施後は僅かだが実施前に比べてダイルームで過ごされる時間が増えている。以前は D 様が好んで座られるテーブル席があったのだが、環境づくりのためそのテーブル席を移動してしまった。しかし、新しい環境にすぐに馴染まれ環境づくり実施後は沢山のご利用者との関わりを持たれるようになった。また、環境づくり実施前は食後居室へ戻られることが多かったが、環境づくり実施後は自らソファリビングに座って過ごされるなど居場所を増やすことが出来ている。

E 様 女性

日中（6：00～19：00）



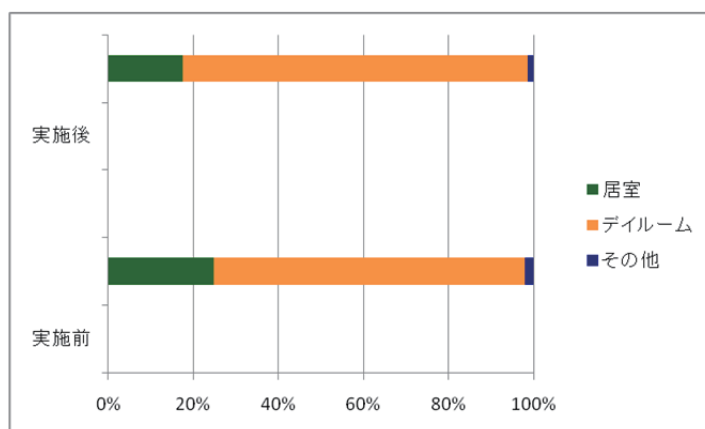
夜間（19：00～6：00）



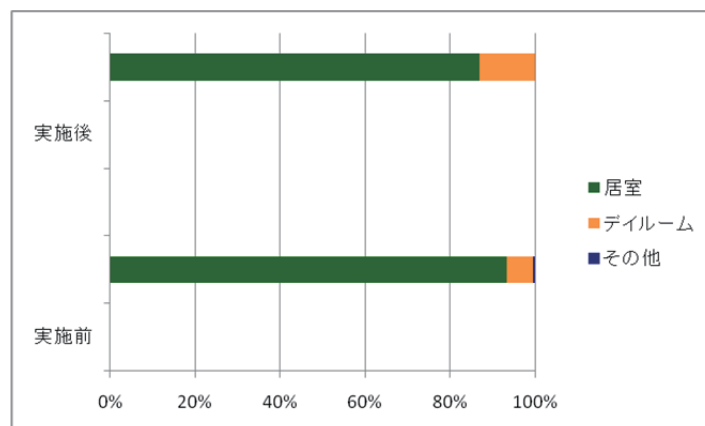
日中は居室とデイルームを行き来され過ごされている。排便が滞ってしまわれるとあまり居室から出て来られないことが多く、入浴拒否や口腔ケア拒否も見られ、夜間帯になると職員に対して不満を訴えられる。デイルーム窓際にある縁台に座られることが多く、一人で過ごされることを好まれ他ご利用者との関わりを好まれない方である。環境づくり実施前に比べて実施後の方がデイルームで過ごされる時間が増えている。これはキッチン前のソファスペースで過ごされる時間が増えた為である。環境づくりにより E 様にとって居室以外にも一人でゆっくりと過ごす居場所を作ることが出来た。

F 様 女性

日中（6：00～19：00）



夜間（19：00～6：00）



日中は毎食後居室に戻られており、同室のご利用者との居室で談話して過ごされている。時々不安になられ感情失禁されることがある。環境づくりを実施したソファリビングやキッチン前のソファスペースに座られることはあまり見られないが、環境づくり実施前と実施後と比較してみるとデイルームで過ごされる時間が増えている。食事席が以前より狭くなったことで食事時職員と会話する機会が増え、安心感を与えることに繋がったことと、リビングなど大きく変更のあった環境だけではなく、パーテーションの色や献立表、時計の位置や掲示物等の変化が F 様に居心地の良さを感じさせたのではないかとと思われる。

結果と考察

6名のご利用者の行動観察記録を行い、環境づくり実施前と実施後でご利用者のデイルーム滞在時間を比較してみたが、数値では大きな変化は見られなかった。しかし今回実施した環境づくりがご利用者のそれまでの生活に影響を与え、なお且つ新しい環境をご利用者が自発的に活用されていることを実感することが出来る結果となった。

E様は他ご利用者との関わりを好まれず普段から一人で過ごされている。E様にとって新しく出来たキッチン前のソファスペースは、食事席に近いがインテリアが違う為別の一画のように見え、一人でゆっくりとくつろぐことが出来る「居場所」になっている。また、D様にとっては新しい環境が他ご利用者とのコミュニケーションを生み、ご利用者間での会話も増え生活に潤いを与える結果となった。F様にとってはデイルームの雰囲気明るくなり、食事席がまとまったことで職員との会話時間が増え、安心してデイルームで過ごされることが多くなった。A様、B様ともにデイルームで過ごされる時間は減っているが、夜間デイルームに起きて来られる回数が減少し安眠されるようになっている。日中の生活が充実したことで、少なからず夜間の睡眠時間に影響を与えているのではないかと推測される。

以上のように今回行った環境づくりは、ご利用者にとって安心して過ごせる新しい居場所をつくただけではなく、ご利用者が過ごし方を選択できるようになり、より自分らしく、よりくつろぐことが出来る時間の提供にもなったといえる。

V 職員意識調査

V-1 キャプションカードの分析/キャプションカードに見る職員の視点の変化

キャプション評価にはご家族も参加されたが、ここでは職員のキャプションカードを取り上げて分析を行う。職員によるキャプション評価では、環境づくり前には67枚のカードが、環境づくり後には41枚のカードが得られた。環境づくり前に参加した職員数は28名、環境づくり後は18名である。職員の異動と多職種からのキャプションカードが得られなかった為、環境づくり後の枚数が少なくなっている。

キャプションカードを職員が取り上げた場所別に分類するとデイルームが大多数を占めている。ここでの場所の呼び方は、職員がカードに記入したものである。デイルームについて、環境づくり前（図1）には、ただデイルームと呼んでいることが多かったが、環境づくり後には、リビングや面会スペースなどと職員が空間により呼び方を変えていることが分かる（図2）。

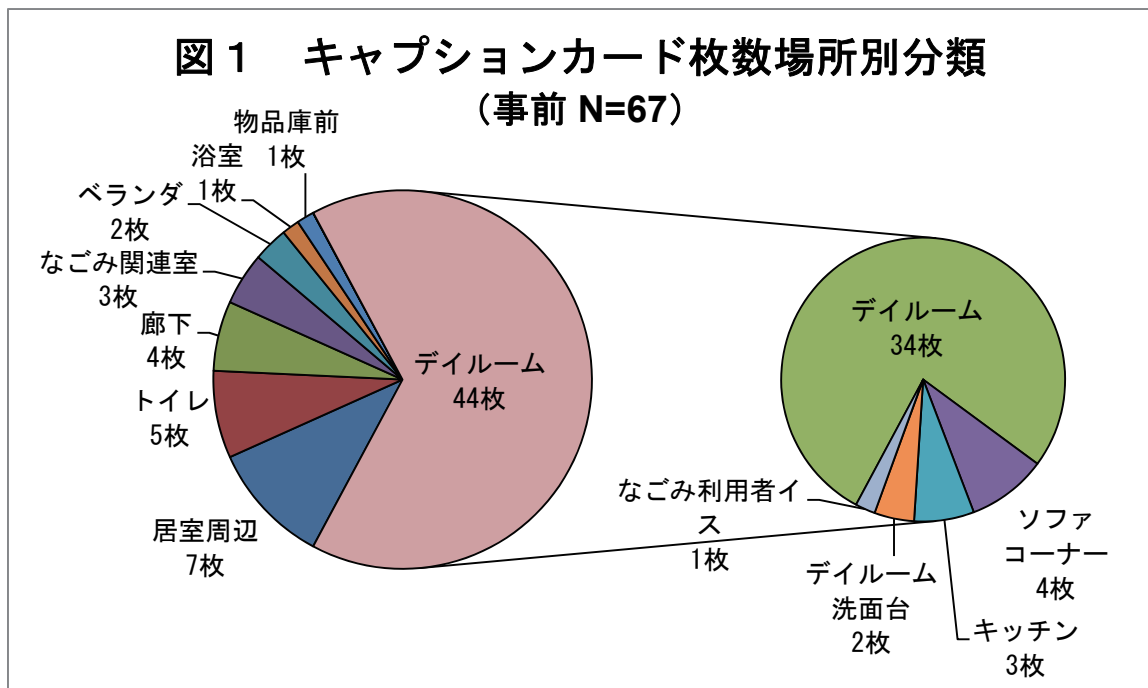
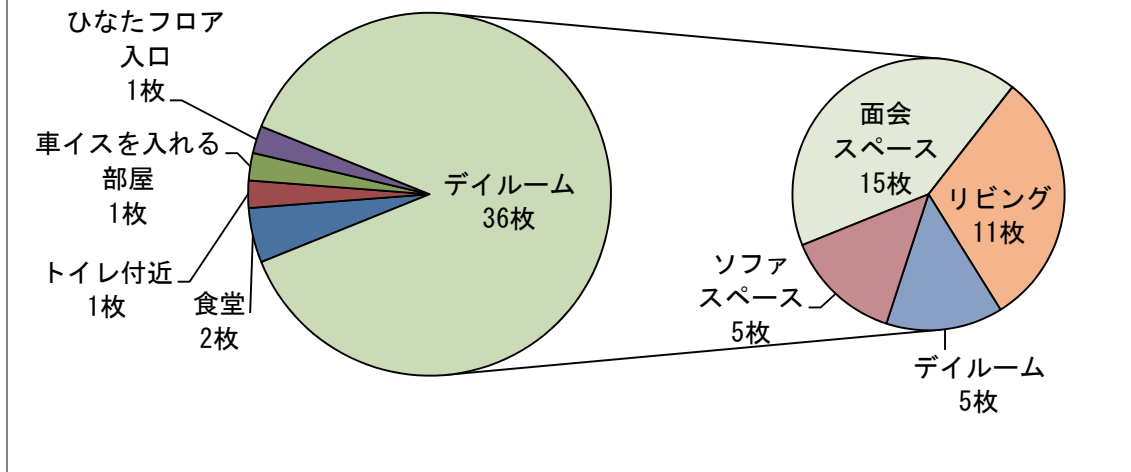


図2 キャプションカード枚数場所別分類
(事後 N=41)



キャプション評価では、取り上げる環境について、よいと感じているか、悪いと感じているか、どちらともいえないかを評価する。環境づくり前には、×評価が75%を占めていたが、環境づくり後には○評価が51%に増加している(図3)。先行研究では、施設職員は自施設について厳しい評価を行う傾向があるといわれているが、今回は環境づくり後には肯定的な評価が増加している。

図3 環境の評価(良い・わるい・どちらとも)

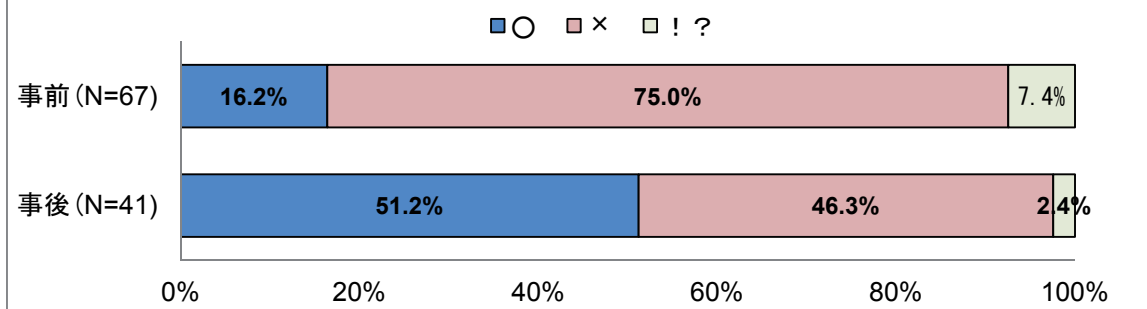


図4では、得られたキャプションカードの「どのように感じたか」の部分をもとに、PEAPの8次元のどこに該当するかを分類した。記述の内容により、複数の次元に該当する場合もある。キャプションカードの合計数に占める割合をみると、環境づくり後には環境の刺激、自己選択、ふれあいの次元に該当するカードが顕著に増加している（図4）。

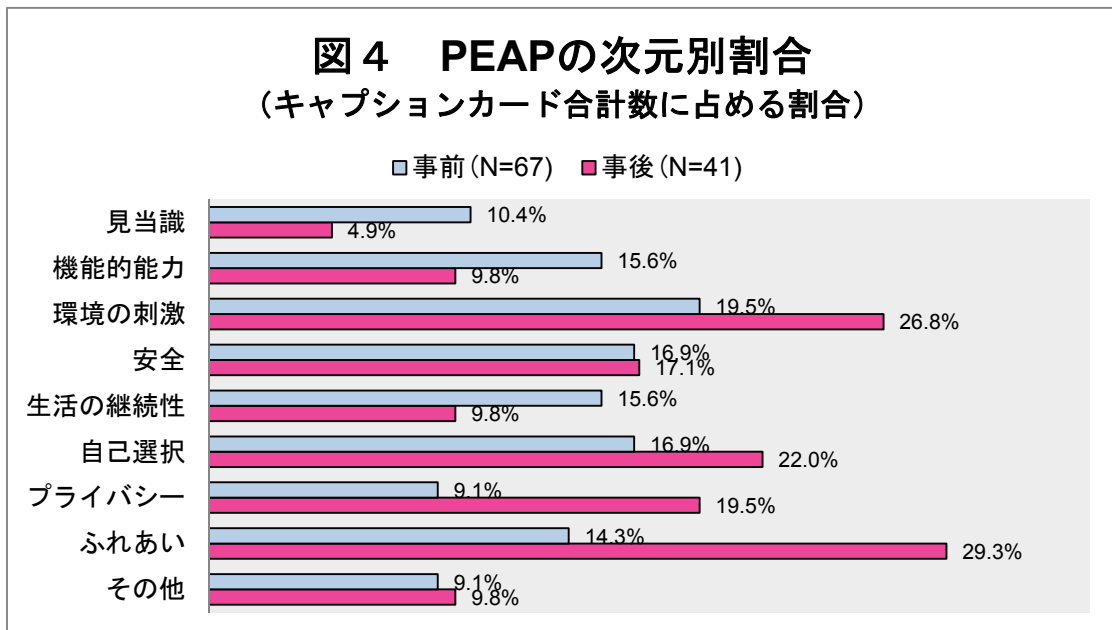
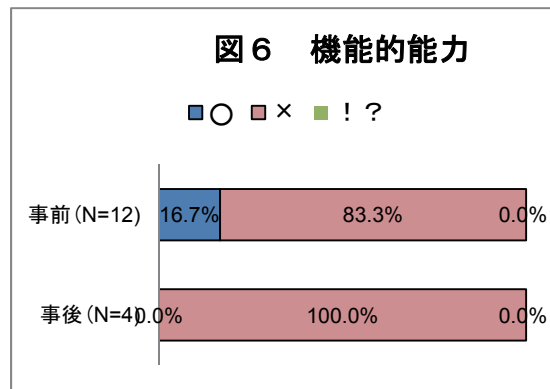
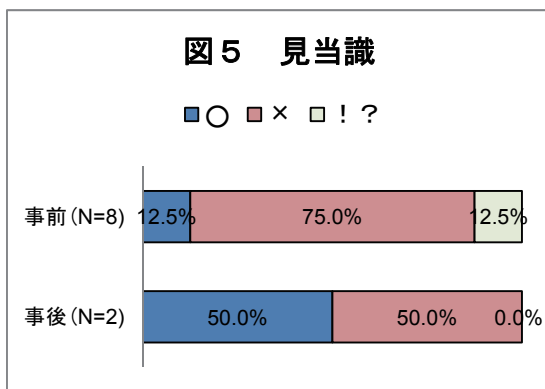
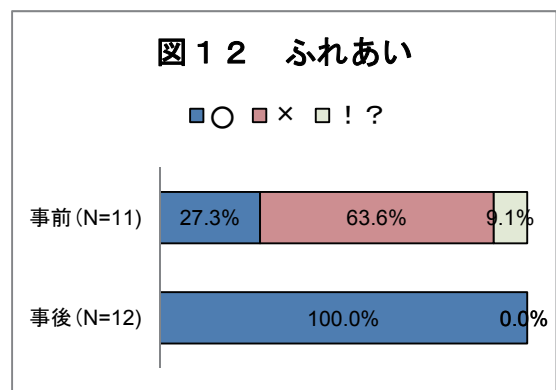
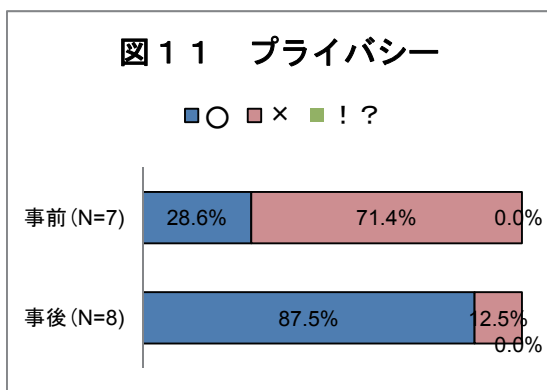
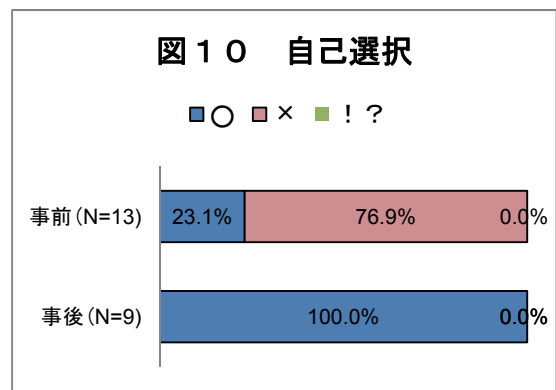
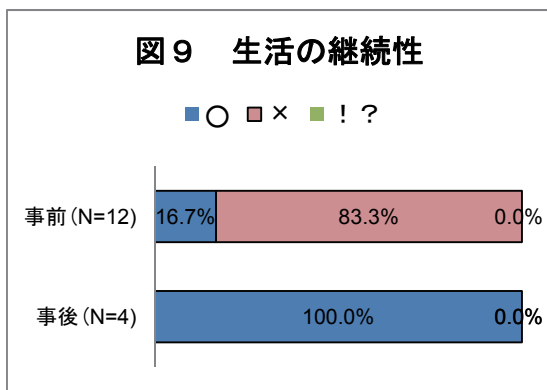
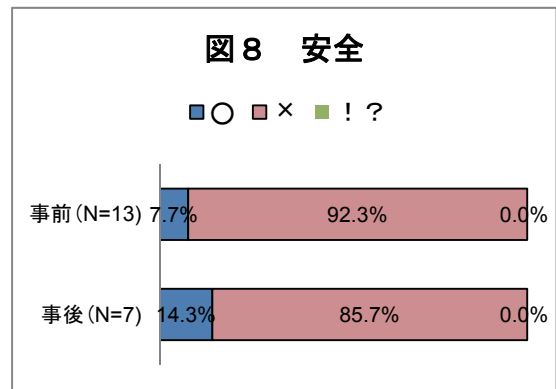
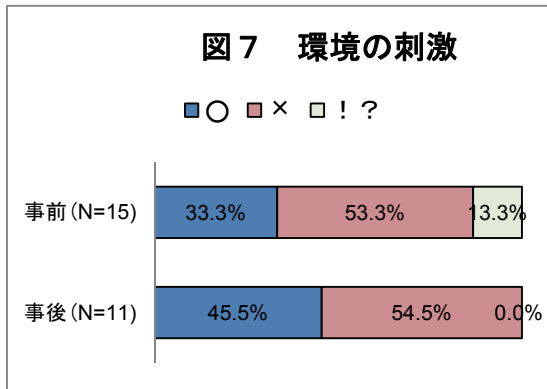


図5～図12では、各次元について、環境づくり前と後を比較して、キャプションの評価が「よい○」か、「よくない×」か、「どちらともいえない」かの割合を示している。生活の継続性、自己選択、プライバシー、ふれあいの次元では、環境づくり後のキャプションはほぼすべて「よい」とする内容であった。機能的な能力や安全の次元では、「よくない」の評価が、キャプションカードの枚数は少ないがまだみられた。





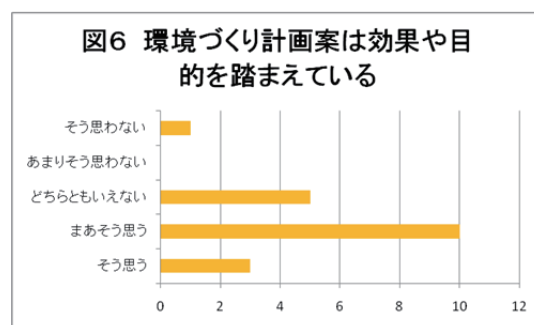
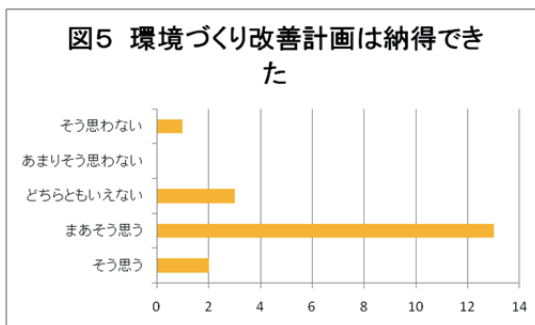
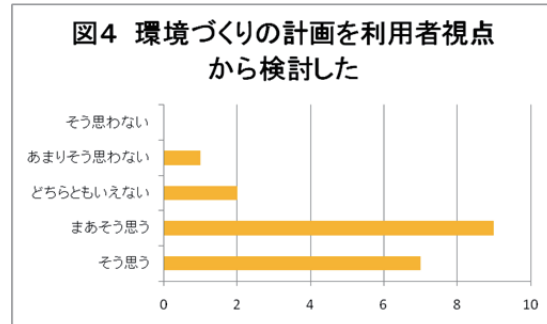
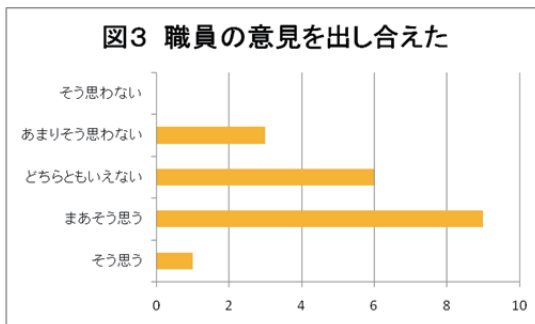
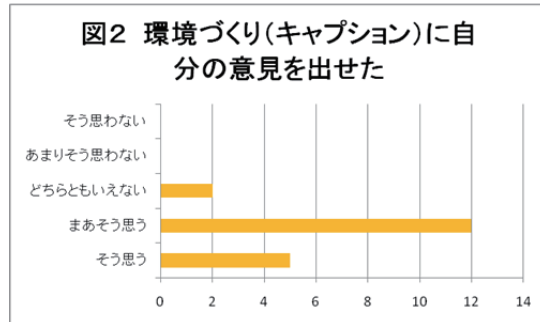
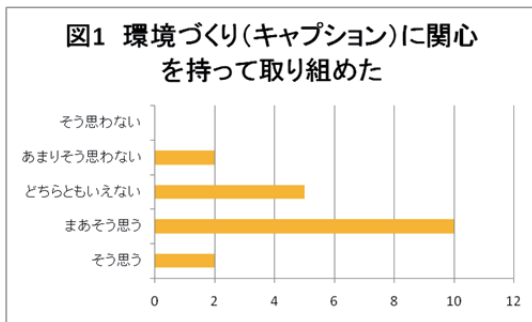
V-2 職員の環境づくりへの参加に関する意識調査

環境づくりの準備期・実施期・実施後に合わせて職員アンケートを行い、職員の環境づくりへの参加に関する意識調査を実施した。(準備期・実施期回答職員数19名、実施後回答職員数18名)

〈準備期〉

準備期は職員が「PEAP」を理解したうえで一人一人がキャプションカードを作成し、実際の環境づくり計画案が決定した段階でアンケートを実施した。

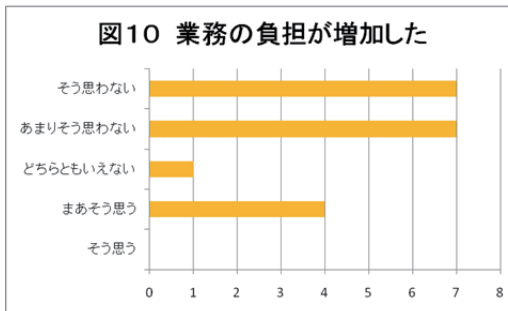
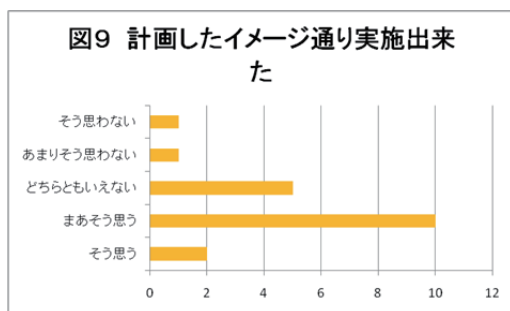
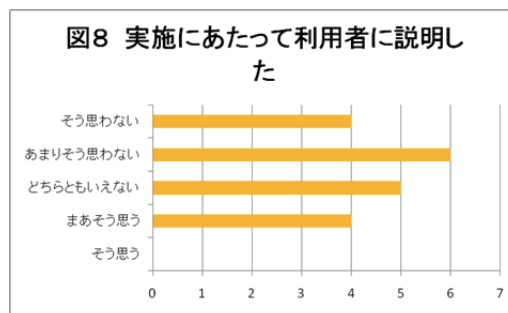
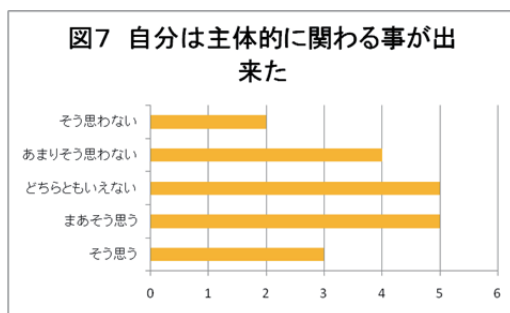
図2が示している通りキャプションカードの作成は普段自分の意見が出にくい職員にとって自分の意見を出せる有効な手段となったようだ。1名だけ環境づくりに対して納得できていない職員がいたが半数以上の職員が賛成し準備に取り掛かることができた。



〈実施期〉

実施期と実施後のアンケートは環境づくりの実施後まとめておこなった。

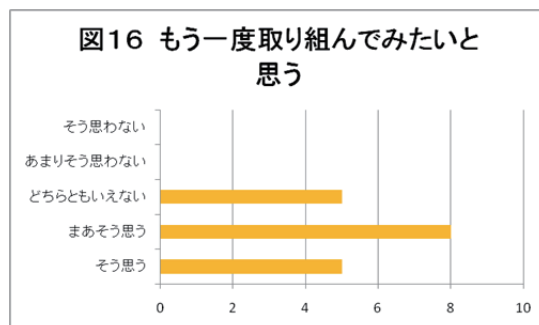
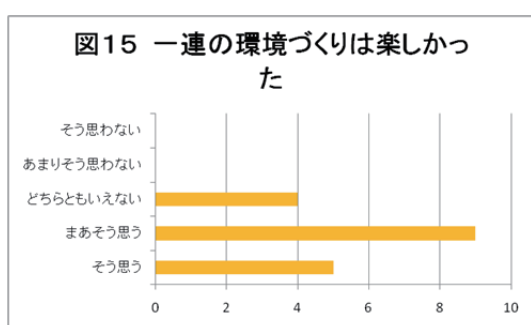
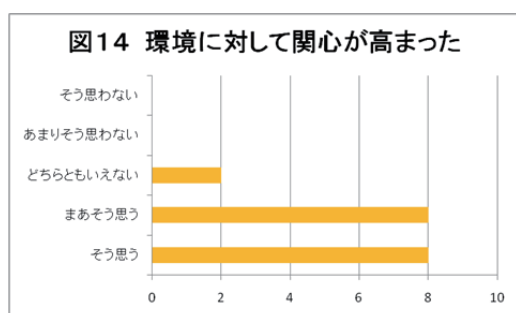
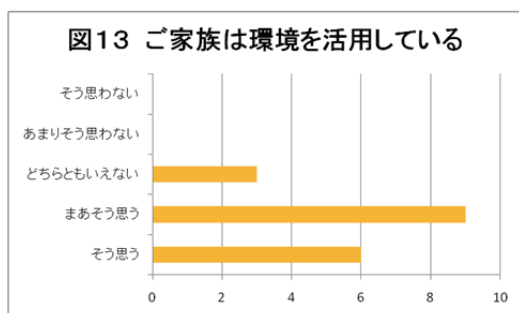
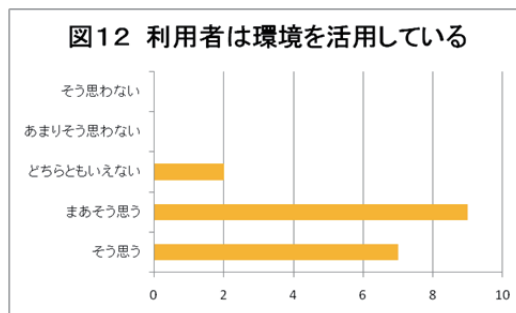
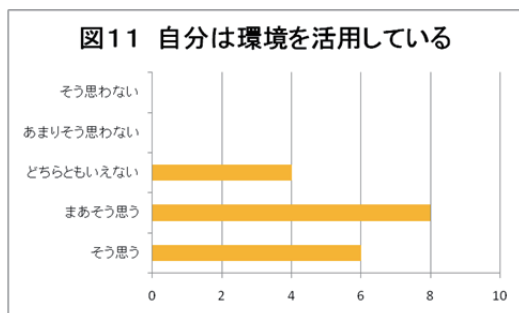
実施期はコアメンバーが主体となって家具類の購入などにあたっていた為、主体的に関わることが出来なかったと思う職員が3割見られた。(図7) グループ会議等で話し合いを行い購入家具類の決定に関しても職員の意見を出し合っておこなっていたが、実際に購入などに関わっていないと疎外感を感じてしまうのかもしれない。しかし、その反面「計画したイメージ通り実施出来た」と殆どの職員が感じている。話し合いを重ねて計画したことがこの結果に繋がっているのだと考えられる。(図9)



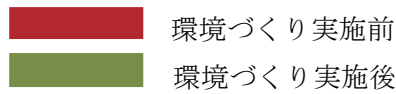
〈実施後〉

実施後では殆どの職員がご利用者もご家族も自分自身も環境を活用できていると答えている。(図11～13)

また、環境づくりへの関心が高まった(図14)環境づくりが楽しかった(図15)と答えている職員が多く、今後の環境づくりにも期待が持てる結果となった。



V-3 多面的施設環境評価尺度による職員の間への満足度調査



〈生活の継続性について〉

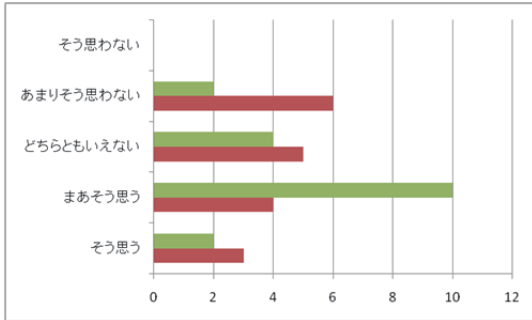


図1-利用者がこれまでの生活を継続している

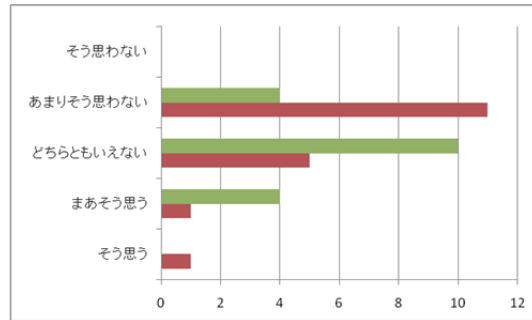


図2-利用者が自分の役割を見出す工夫がされている

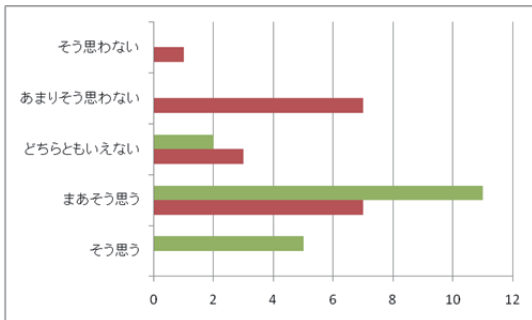


図3-居室以外の場所での寛ぎやすさがある

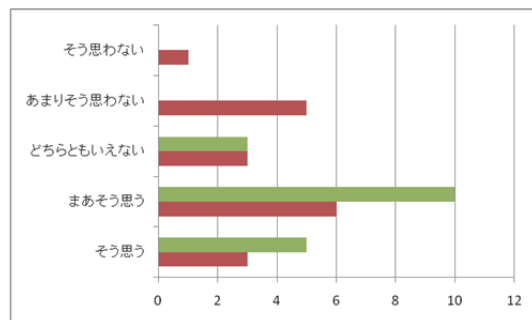


図4-利用者同士が気軽に集まれる場所がある

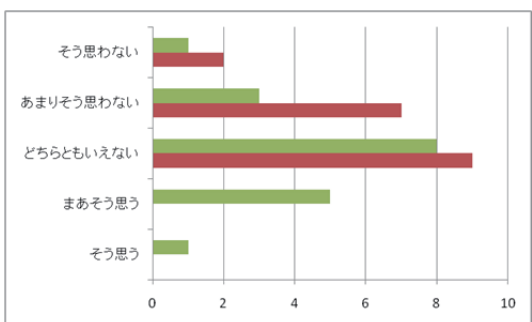


図5-高齢者の文化や世代に合った装飾がされている

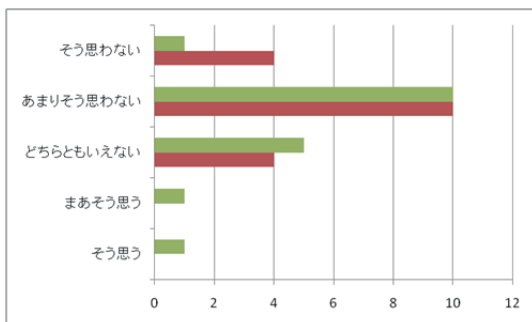


図6-地域や街とのつながりが感じられる

〈生活の継続性〉については実施前より実施後の方が、図3「寛ぎやすさがある」や図4「利用者同士が気軽に集まれる場所がある」に対して「そう思う、まあそう思う」と答えた職員が8割以上を占めており、環境づくりがご利用者にとって新しい居場所になったと感じられる結果となった。

〈個人の尊重〉

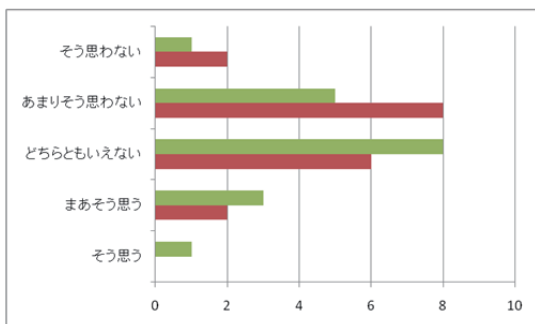


図 7 ー個人の好みや個性の尊重がされている

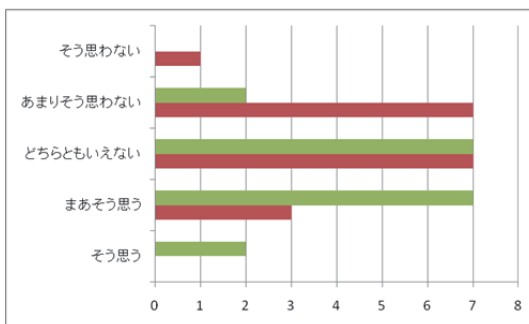


図 8 ー利用者が自分で選択する機会がある

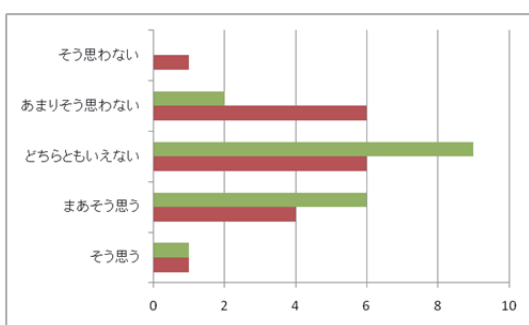


図 9 ー楽しみを生み出す働きかけがされている

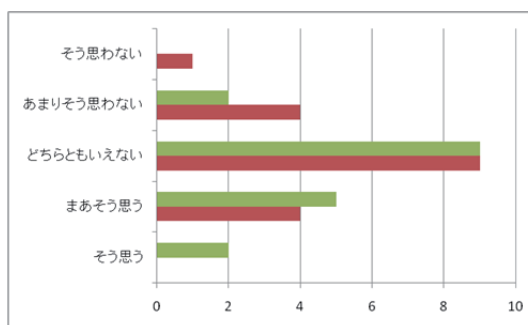


図 10 ー心地よく食事をする工夫がされている

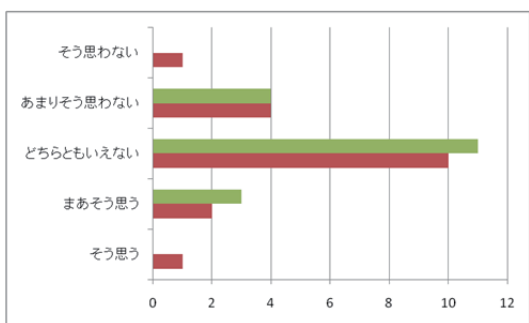


図 11 ー利用者が希望を職員に伝えやすい

〈個人の尊重〉に関しては、図 8「ご利用者が自分で選択する機会がある」に示されるように、実施後はご利用者が選択する機会が増えたと半数の職員が感じられる結果となった。

〈交流〉

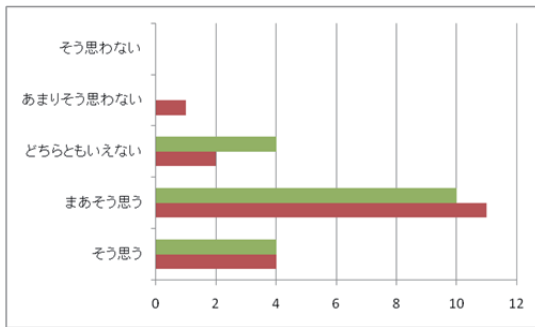


図 1 2－利用者同士の会話ややりとりがある

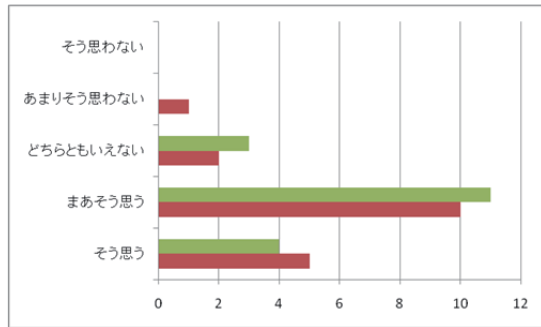


図 1 3－職員との会話ややりとりがある

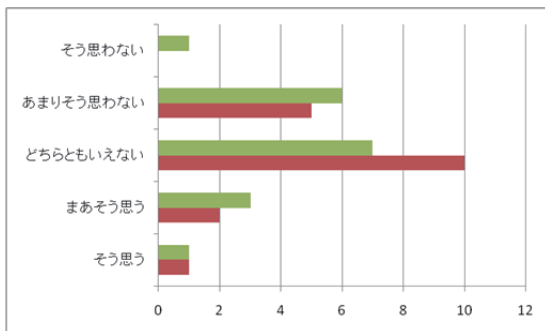


図 1 4－地域の人との交流の機会がある

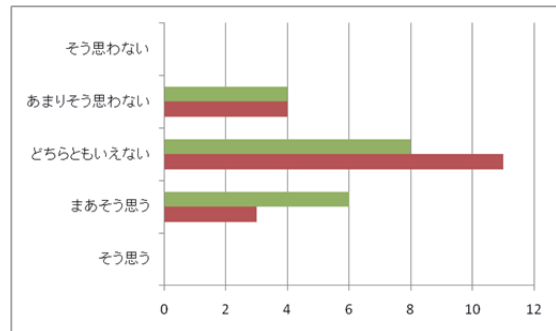


図 1 5－職員や施設に対する家族の気兼ねがない

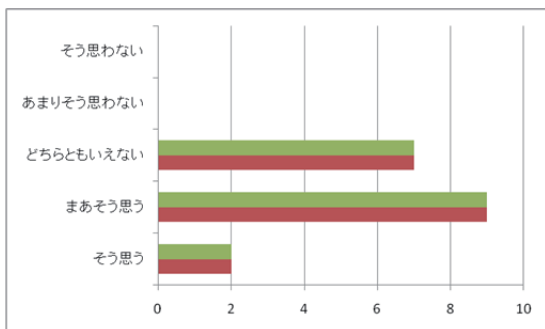


図 1 6－家族が気軽に訪問することが出来る

〈交流〉では実施前、実施後での職員の意識に大きな変化は見られなかった。「振り返りシート」の課題に見られたように、なごみ職員だけでなく、ひなた職員も新しい環境をご家族やご利用者、職員が活用できるように工夫しなければならないと感じていることがうかがえる。

〈プライバシーの確保〉

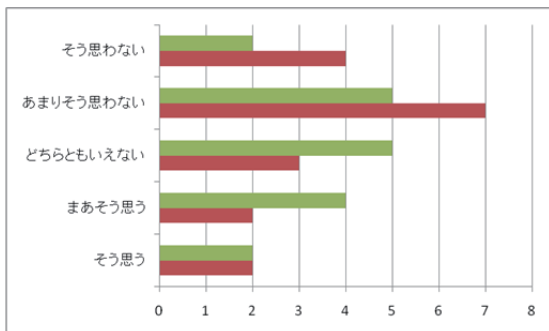


図 1 7 - 利用者が一人になれる場所がある

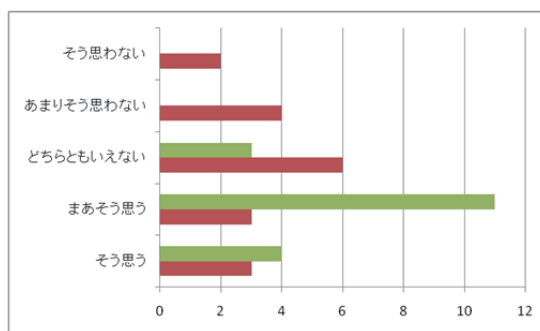


図 1 8 - 利用者が気の合う者同士少人数で過ごす場所がある

〈プライバシーの確保〉ではご利用者が気の合う者同士少人数で過ごす場所が出来たと感じられる結果となっている。(図 18)

〈空間や場所の雰囲気〉

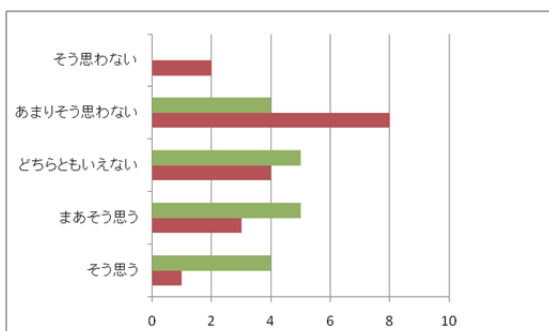


図 1 9 - 家庭的な雰囲気がある

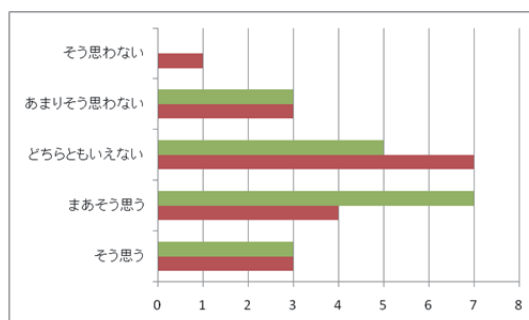


図 2 0 - 整然とした雰囲気がある

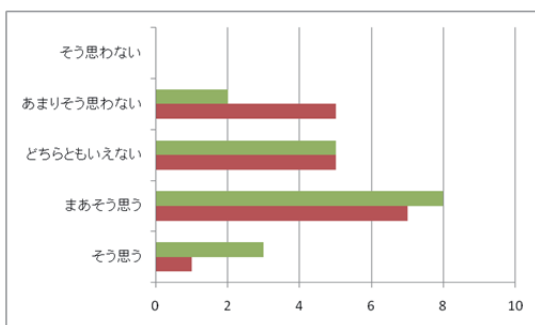


図 2 1 - 清潔な雰囲気がある

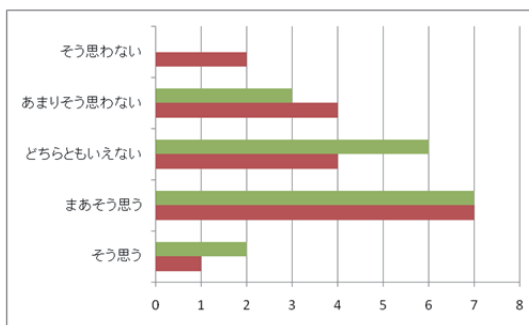


図 2 2 - 開放的な雰囲気がある

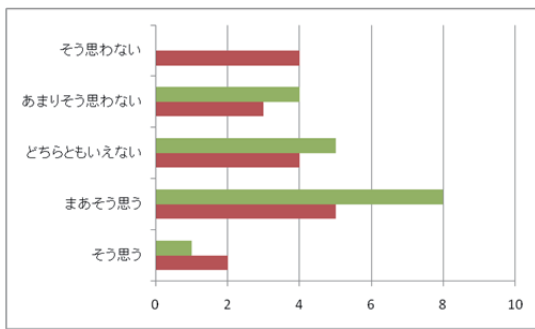


図 2 3 ー季節や天気の移り変わりが感じられる

〈空間や場所の雰囲気〉ではインテリア類がベージュ系で統一され、清潔感や空間のまとまりが感じられ家庭的な温かみを感じられる結果となった。

〈職員のモチベーション〉

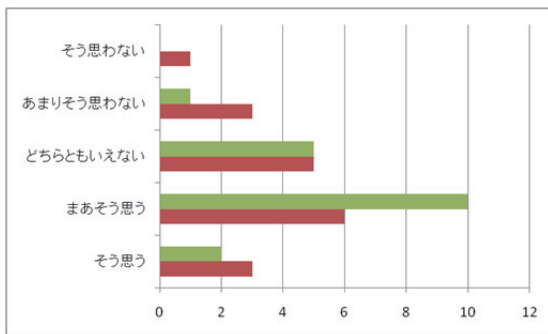


図 2 4 ー職場の仕事への意識が高い

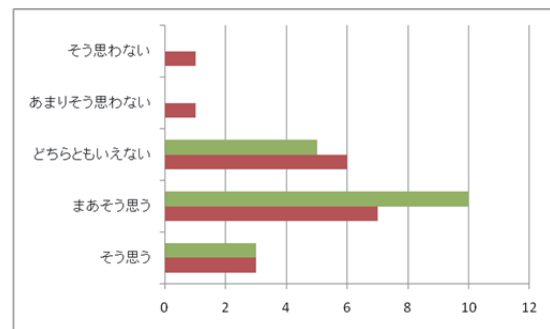


図 2 5 ー職場のチームワークが良い

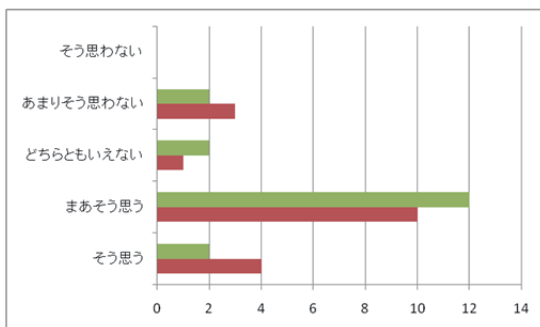


図 2 6 ー個人やチームで仕事のやり方を工夫している

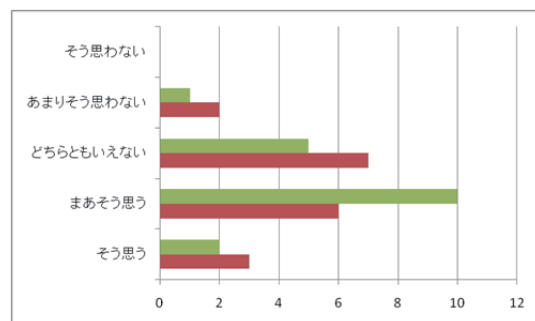


図 2 7 ー職員の様子にやる気を感じられる

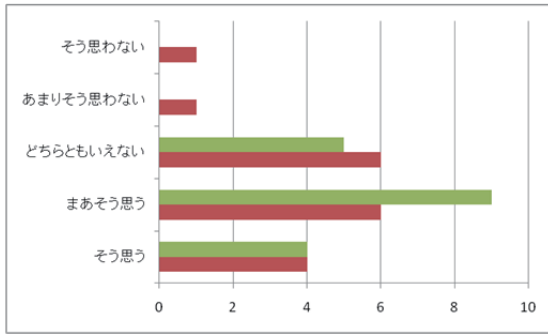


図 2 8 - 管理者が職員の要望に理解がある

〈職員のモチベーション〉では職員の仕事への意識の高さややる気を感じられ、チームワークが良くなったと感じられる結果となっている。

〈総合満足〉

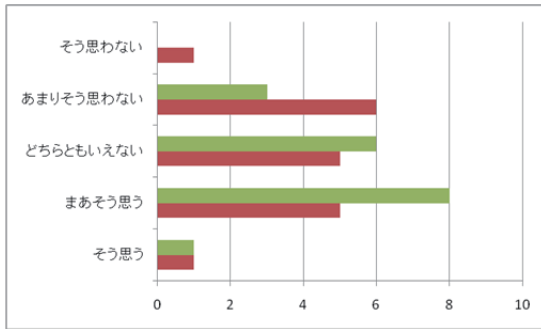


図 2 9 - ADL 低下に対する空間や設備の対応がされている

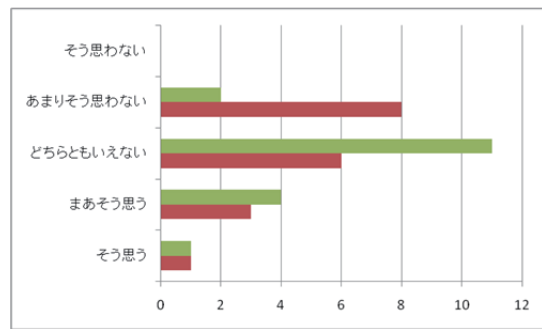


図 3 0 - 日々の生活に変化やメリハリがある

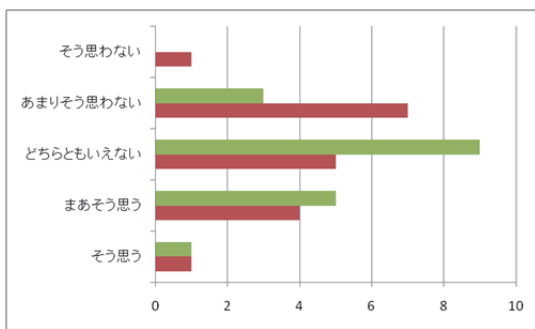


図 3 1 - その人らしさが尊重されている

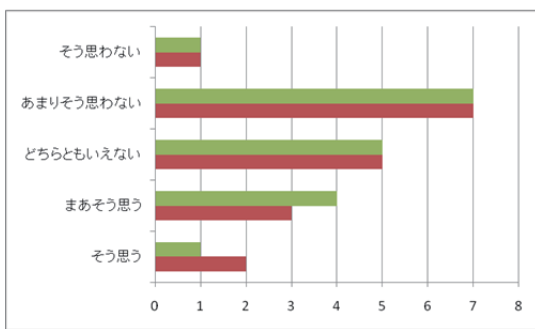


図 3 2 - 利用者が外との交流が持てる

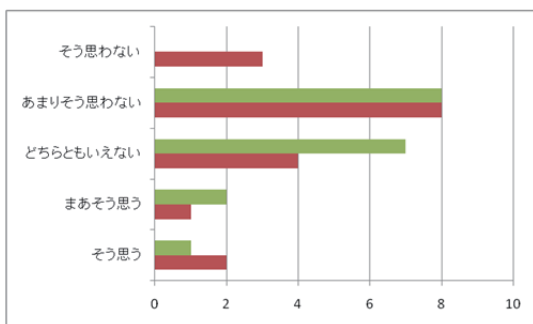


図33 一外とのつながりを感じる事が出来る

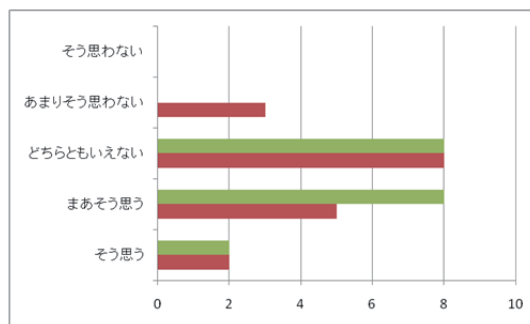


図34 一家族が安心感を持つ

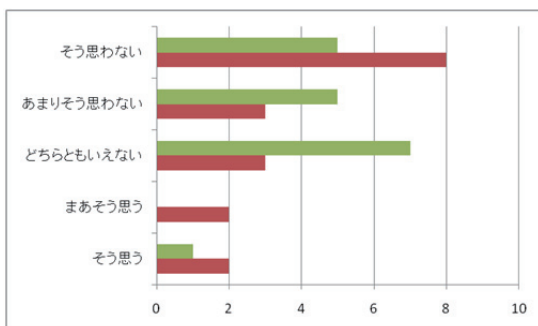


図35 一私が年をとったらこの施設に入りたい

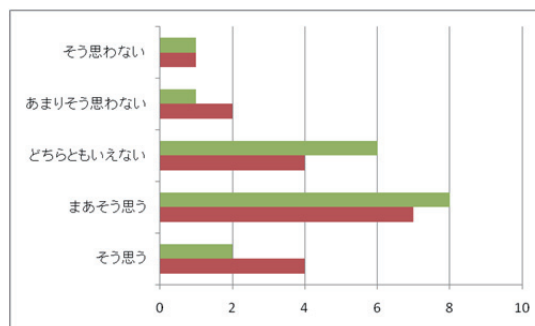


図36 一今の仕事が好き

〈総合満足〉では図31に見られるように、「その人らしさが尊重されている」環境づくりが行えたことでご家族の安心感にも繋がる結果となった。その反面、図35に見られるように「年をとったらこの施設に入りたい」という職員数が減少している。実施前と実施後では退職などにより職員の入替えがあった為、このような結果になったと思われる。

VI 考察

これまでの南陽園5階にはご利用者の居場所が居室とダイルームにある食事席、ダイルームの壁に沿って配置されたソファしかなく、ご利用者のプライバシーが保たれる場は居室以外には無かった。従来型施設特有の無駄に広だけの空間は施設感丸出しの環境で「家庭的な雰囲気」とは程遠くご利用者が心地よく過ごせる環境ではなかった。1年前に業務改善とともに生活自立度の高いご利用者が過ごされているダイルームにキッチンを設置し、多くの女性ご利用者に「家事」を継続して行って頂けるよう取り組んだことで「役割」を感じてもらうことには繋がったが、居室以外の「居場所」を提供することは出来ないうた。

今回「PEAP」を基にダイルームの環境づくりを行うことで、ご利用者が居場所を選択してくつろぐことが出来る環境を提供することが出来た。また、ご家族から要望のあった「面会スペース」の設置も行い、ご利用者とご家族が職員に気を使わずにゆっくりとした時間を過ごせる場も提供することが出来た。

ひなたグループではダイルームにソファリビングを設置しダイルームをダイニングスペースとソファリビングスペースに分けることで新しくご利用者がくつろげる空間作りを行うことが出来た。ソファリビングはすぐにご利用者の生活に馴染み、ご利用者が食後くつろぐことができる居場所となっている。また、キッチン前にソファスペースを設けご家族面会時に使用できるスペース作りも行い、必要時プライバシーが保てるようロールスクリーンの設置もおこなった。その結果、居室以外にもダイニング、ソファリビング、ソファスペースとご利用者の居場所が増えご利用者自身が自ら居場所を選択して過ごせるようになった。

ご家族面会時にはキッチン前のソファスペースをロールスクリーンで区切ることでプライバシーに配慮し、ご家族とご利用者が気兼ねなく面会を楽しめる環境づくりがおこなえた。

6名のご利用者の行動観察記録を比較して見ても、新しい環境は明らかにご利用者のくつろげる居場所となっていることがわかる。また、ご利用者同士のコミュニケーションの場となり、居室以外にも安心して過ごせる場となっている。

ひなたグループでは今回取り組んだ環境づくりがご利用者の生活に自然に馴染み、活用されている。生活自立度の高いご利用者が過ごされているひなたダイルームには今回環境づくりを実施するまでの間、ご利用者のプライベート空間といえる場所は居室以外には無かったことがうかがえる。プライベート空間というのは1人で過ごすことが出来る場だけでなく、気の合うご利用者同士少人数で過ごせる場や気兼ねなくご家族と過ごす場なども挙げられる。今回の環境づくりにより居場所が増えご利用者自身が自分の意思で居場所を選択し、日々の過ごし方を選択できるようになった。

また、睡眠不足のご利用者や傾斜の見られる利用者にはソファに座って頂くなど職員もご利用者の身体的状況に合わせて環境を使用することが出来ている。ひなたグループで

はご利用者の行動や声をダイレクトに見聞きすることが出来る為、今後もご利用者の声を聞きながらご利用者が望まれる環境づくりを継続しておこなっていく必要がある。

なごみグループもひなたグループと同様にフロアの一画にソファスペースを設置し、日中くつろぐことが出来る環境づくりをおこなった。また、なごみキッチン横スペースを整備して面会室として使用できるように環境づくりをおこなった。しかし、当初なごみ職員全員一致の意見で取り組んだ面会室は実際には思うように機能していない状況である。生活自立度の高いご利用者と違い、なごみグループでは食事や排泄などの日常生活に介助を要するご利用者が過ごされている為、ご家族面会時には職員がご利用者を面会室に誘導する必要がある。職員が食事介助や排泄介助に携わっている時はご家族が遠慮されてしまい面会室の使用を断られてしまうことが面会室が活用できていない大きな理由になっている。また、環境づくり実施前には「面会室をつくり活用したい」と一致していた職員の意見が、実際に環境づくりを実施した後は「狭く感じて使いづらい」「誘導しづらい」など消極的な意見に変わってしまったことも理由の一つに挙げられる。

環境づくりを実施したのが冬であったこともあり、今後暖かい季節になれば現在よりもテラス散歩等も兼ねて活用できるようになるのではないかと考えられる。

ソファスペースに至ってもなかなか活用されておらず、設置してもしばらくの間はソファスペースには誰も座っていない状況が続いた。また、当初の計画ではダイルームに背を向けてソファスペースをプライベート空間の一画として使用する目的であったのだが、「見守りがしづらい」という職員意見から配置を変更しダイルームを見渡す配置になり、プライベート空間作りは行えていない結果となっている。そこで、新しい環境を活用する為になごみ職員にアンケートを行い、改善点を挙げてもらうことで環境を積極的に活用できるように試みた結果、現在では足の浮腫が酷いご利用者や傾斜が強いご利用者をソファスペースに誘導し環境を活用できるようになっている。今後も介助を要するご利用者にとって、「見守りのしやすさ」という職員目線ではなく、「他人の視線を気にせずにくつろぐことができる」ご利用者目線でご利用者の望む環境づくりに取り組んでいかななくてはならない。

今回我々が取り組んだ環境づくりはご利用者の居場所づくりに繋がり、職員の意識改革にも繋がる結果となった。しかし、実施した環境づくり全てがご利用者の生活に活かされているわけではない。環境づくりは必ずしもすぐに結果が出るわけではないということが分かった。全ての環境が生活に馴染み、使いこなしていくためにはもう少し時間がかかるのかもしれない。

VII 課題

今回は2つのグループダイルームの環境づくりに取り組んだが、今後はなごみグループの面会室の活用と、ご利用者の居場所の1つである居室の環境づくりに取り組んでいくことで、更にご利用者が安心して生活できる環境を提供できることにつながると思われる。

参考文献：

児玉桂子他編著「PEAP にもとづく認知症ケアのための施設環境づくり実践マニュアル」、
中央法規、2010

「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり実践マニュアル」CD、日本社会事業大学+ケア
と環境研究会

南陽園における環境づくりの成功のポイント

認知症介護研究・研修東京センター副センター長 児玉桂子

南陽園では数年前から、職員の努力により環境づくりが進められ、大規模な施設でありながら、少しずつ認知症の方々が落ち着いて過ごせる工夫が行われています。そのような中で、今回環境づくりに関わらせていただきましたが、報告書にもあるように新しいリビングは、職員の期待以上にご利用者の生活になじむ結果となりました。比較的自立度の高いグループでは、広いダイニングが食事スペース、ソファのあるリビング、ご家族と過ごすスペース、ひとりで過ごすコーナーに分けられ、明確になりました。その結果、食事後にご利用者は自分で居場所を選択する姿が見られるようになりました。認知症の人が持つ力やそこに及ぼす環境の影響力を、改めて認識しました。

環境づくりは6ステップから構成されていますが、成功のポイントとして以下のような点が上げられると思います。まず、環境づくり全体を通じての共通の視点となるPEAP（認知症高齢者への環境支援指針）を、職員全員が勉強会や施設環境づくりCD（画像・音声付）などを通じて、共有するところからスタートしています。次に、環境の課題を把握するキャプション評価を介護職・その他多職種・ご家族の参加で行い、異なる視点から課題を抽出して、共有することができました。プログラムの前半部分を丁寧に取り組みされたことが、ご利用者のニーズに合致した環境づくりにつながったと思います。

常時介護が必要な重度の方が過ごすグループでは、ソファコーナーやご家族と過ごすスペースは、当初の予想のようにはまだ活用されていない状況です。職員のさらなる意識改革が必要なのか、床に寝転ぶ人もいるご利用者のニーズに合っていないのかなど、さらに観察と工夫を継続してほしいと思います。

施設環境づくり支援プログラムの教材として、「PEAPにもとづく認知症ケアのための施設環境づくり実践マニュアル（中央法規）」、「実践マニュアルCD版（日本社会事業大学）」、「環境づくりHP <http://www.kankyozukuri.com>」などが用意され、独力でも取組可能となっています。今回は、①コアメンバーが2日間の環境づくり集中講座に参加して、取り組みのプロセスを習得、②専門家によるPEAPの講義、③キャプション評価実施後のアドバイス、④環境づくり計画立案へのアドバイス、⑤環境づくり終了後の活用や評価へのアドバイス、これらの時期に専門家が支援を行いました。これまで、多様な研修や環境づくり実践への支援を日本各地で行ってきましたが、今回の支援の係わりは、適切な程度であったと思います。

現場の方々との環境づくり実践には、毎回学ぶことや驚きがあります。今回は、1年という限られた時間の中で、環境づくりを実践され、さらに多くの評価を行い、それを忙しい業務の合間にここまでまとめられた熱意に脱帽です。これからも、環境を活かしたより良いケアや暮らしを創出するように期待しています。

報告書名

平成 23 年度 認知症介護研究・研修東京センター研究事業

「認知症高齢者への環境支援指針（PEAP 日本版）」
を取り入れた認知症フロアの居場所づくりと
利用者の変化に関する研究
報告書

発行元

社会福祉法人浴風会
認知症介護研究・研修東京センター
〒168-0071
東京都杉並区高井戸西 1-12-1
TEL: 03-3334-2173 FAX: 03-3334-2156

発行年月

平成 24 年 3 月